

少女は諦めが悪い

アイリスさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幸子が目覚めたのは、知らない場所。そこが人類と深海棲艦の対立する世界で自身の住む世界とは別の場所だと知った幸子は、元の世界に戻るために奮闘する……。

※艦これとデレマスのクロスオーバー（と言ってもほぼ艦これです）。艦娘、深海棲艦の定義に独自設定を含みます。

※本作品は作者のSS『抜錨するっぽい!』のスピノフです。しかしながら『抜錨するっぽい!』を読まずとも内容を理解出来るようには書いています。

※完結しました。

目次

1話	導入	1
2話	幸子の一番長い1日(前編)	8
3話	幸子の一番長い1日(後編)	15
4話	検査	21
5話	衝撃	28
6話	謁見	34
7話	出会い	41
8話	慢心	48
9話	練習航海	55
10話	世の中そんなに甘くない	61
11話	主人公が強いなんて幻想である	67
12話	再起動	73
13話	真の実力	79
14話	訓練開始	85
15話	不安	92
16話	激闘	98
17話	エピローグ、そして	106

1話 導入

ぶくぶくぶく……。顔まで浴槽に浸かり、その口から空気が抜けていく代わりにお湯が入ってくる。当然ながら、苦しい……。兎に角苦しい。

「……………ぶはっ!?ゲホツ、ゲホツ、ゲホツ」

溺れる寸前、少女は辛うじて意識を取り戻して顔をお湯から出し、咳き込んだ。間一髪だ。

「はあっ、はあっ、はあっ」

息を整え「全く、死ぬかと思いましたよっ!」と思わず叫んだ後、我に返って周りを見渡す。

どうも自分でも気が付かないうちに入浴中に眠ってしまったらしい。だが、妙だ。

どうやら此処は大浴場の浴槽の中で、明らかに少女の自宅では無い。こんな場所に来た覚えも無い。何より、今居るこの場所は初めて見る。それに。少女は目覚める前にお風呂に入っていた記憶は無い。

浴槽に浸かったまま暫し思考を巡らせていた少女がしたり顔で出した現状分析の結論は。

(フフーン、分かりましたよ。これは……………ドツキリの収録中ですね?)

こんな訳が分からない状況を『ドツキリ』の一言で片付けてしまうとは、無駄に逞しい思考の持ち主だ。まあ、それにはそれなりの理由はある。

(フフン、ボクにかかればこの程度の推理はヨユーですね!)

薄紫のボブヘアのこの彼女の名は輿水幸子。それなりに有名なアイドルである……。が、正統派というよりは所謂バラドルに近く、スカイダイビング、絶叫マシン、バンジージャンプ、肝試し、素潜り等、ベテランリアクション芸人宜しく色々な事をさせられているアイドルである。であるから、この普通なら飲み込めないような状況も何時ものように『ドツキリ』の一言で片付けたのだ。

(でも幾らボクがカワイイからって入浴シーンはちよつとやり過ぎじゃありませんかね?)

幸子は14歳。流石に中学性のお色気シーンはテレビ的にも世間的にも不味いのではなからうか?後で彼女のプロデューサーに文句の一つでも言っておこうと誓って、浴槽から出ようとした。

……が、ふと気が付いて立ち上がるのを止めた。

このまま浴槽から出るという行為はつまり、幸子の裸をカメラに晒す事とイコールだ。例えモザイクが入ったとしても流石にそれは憚られるし、アイドルとしてそこまで落ちぶれた覚えはない。少し悩んだ幸子は、仕方無く事態が動くまで浴槽内で待つ事にした。

(それにしても、何というか……不思議なお湯ですね)

浸かっついて気が付いた。このお湯、温度もそれなりにあるしもう暫く経つのに何故かのぼせない。それに疲れが尋常でなくくらい取れる。一体どんな成分が入っていたらこのような効能になるのか。

(……あ、誰か来ましたね)

幸子はプロだ。テレビ的にはこのドッキリに騙されているフリをしておいた方が『おいしい』し視聴率も取れる筈。そう考えて、これから来るであろう仕掛人の話に合わせる事にした。

入って来たのは幸子よりも歳上のお姉さん、といった女性。薄い紫の長い髪、緑がかつた瞳、襟と袖部分が青色のセーラー服を着た綺麗な女性。

(ムムツ、無名の仕掛人にしては綺麗な人……女優の卵ですかね?) 『カワイイ』と自負している幸子ですら綺麗だと認識するくらい的女性。今は無名かも知れないが将来はライバルとなる可能性もある。少しばかり警戒する幸子に向かって、その女性はこう叫んだ。

「弥生ちゃん!!良かった、気が付いたのね!」

さて、どう答えたものか。このドッキリでの幸子は『やよい』と勘違いされているという設定のようだ。それに、その『やよい』に何か善くない事があった、という設定も。これはもう少し情報が欲しい処。

「あの……お姉さん。気が付いた、ってどういう事ですか?」

しまった。質問がストレート過ぎた。もう少し捻って聞けば良かったと後悔している幸子を、その女性は驚いた表情で見詰めている。

「お姉さんって……衣笠さんの事忘れちゃったの!?まさか記憶喪失とか!？」

情報ゲット。どうやら女性の名は衣笠、というらしい。それと、記憶喪失になるような何かがあったという設定だという事も。

だがあまりその辺を追及し過ぎるとドツキりに騙されているように見えない。ここは落ち着いて対処すべき処だ。

「いつ、嫌ですね衣笠さん。ボクは『やよい』さんじゃありませんよ? ハハツ、アハハハ」

苦笑いで答えた幸子を見る衣笠の表情が、見る見る青褪めていくのが分かる。不味い。どうやら番組的に駄目な答えだったようだ。でなければ衣笠があんな絶望的な表情をする筈が無い。しかし、今の答えのどこが不味かったというのだろうか? 青褪める程のNGワードがあつたようには思えない。

それならば。ここは困惑した様子で『やよい』だと主張しドツキりにまんまと引つ掛かった姿を見せてお茶の間の笑いを取る事が正解なのだろう。この『衣笠さん』が青褪めたのもきつと幸子が予想(台本)と違う行動を見せてしまったせいかも知れない。

(それならボクの名演技を見せてあげますよ!)と意気込んだ幸子は、すうー、っと息を吸い込みゆっくりと吐く。今度こそ騙されているフリをする為、態と慌てた様子を見せつつ口を開いた。

「あつ、そうでした!ボクはやよいでしたね!ウツカリしてましたよ!アハハハ」

……と。幸子の言葉を受けた衣笠が一瞬固まった。動き出した衣笠は酷く慌てた様子で浴場から出ていった。どうやらこの返答も不正解だったらしい。

「肯定も否定も間違いつて……じゃあどうしろっていうんですか?!」と憤った幸子は長い入浴から漸くあがり、更衣室と思われる所へと移動。彼女のプロデューサーを捜し出して文句を言つてやろうと

自身の着替えを探す。

「……これ、ですかね？」

濃い紺のセーラー服と、見たことの無い三日月型のヘアピン。明らかに幸子のもものでは無いが、他に着るものは無いようだ。番組で用意した衣装なのだろう。

着替え終わったタイミングで、慌てた様子の衣笠が走って戻って来た。

「弥生ちゃん、来て！」

衣笠に右手を掴まれ、半ば引き摺られるように移動する。その道中の景色もやはり見たことの無い場所。どうやら何かの施設の中らしい事は分かるが、此処がどこで何の施設なのかは皆目見当もつかない。

そうして連れて行かれた場所は、色々な工作機械や道具が所狭しと置いてある場所。過去に一度番組のロケで訪れた経験がある造船所のような所だった。

「衣笠さん、ココは何の施設なんですか？」

幸子のこの質問で、衣笠はいよいよ『ヤバイ』という表情に変わった。ドツキリかも知れない事はすっかり忘却し事態を全く飲み込めない幸子を他所に、衣笠が誰かに向かって語りかけた。

「妖精さん達、弥生ちゃん連れて来たよ！」

……妖精さんって??と合点がいかないまま、幸子は衣笠が語りかけた方角に目を向けた。すると、何処かに待機でもしていたのか、リス程度の大きさの妖精らしき生き物が数人?集まり始めた。

「……はっ?!えっ?!」

幸子が驚くのも無理はない。その妖精らしき生き物は幸子の身体にぴよん、と飛び乗ると、何かを確認するように動き回っている。勿論、身体に登られている感覚もあるし実体もあるようで、ホログラムやロボットの類いには見えない。このような生き物が存在している等、にわかには信じられない。

「どう、妖精さん?」

理解出来ずに思考停止している幸子はさておき、心配そうに妖精に

尋ねる衣笠。妖精達が衣笠に出した結論は『弥生だが弥生ではない』という答えだった。

人間の言葉を話す妖精にも驚きだが、今はそれは割とどうでもいい。幸子にとつて重要なのは先程から衣笠達が自分の事を『弥生』と呼ぶ事実の方だ。

「……さつきから何なんですか！ボクは『やよい』さんじゃ無いって言ったじゃないですか！それにココは何処なんですか！」

「弥生ちゃん、それ本気で言ってる……のよね？」

幸子の両肩を掴み顔を覗き込み、不安そうに視線を向ける衣笠。一体何なのだ。衣笠の手を振り払い、その場から走り去ろうとした幸子は、たまたま目の前の壁に掛けてあつた鏡に映った自身の顔を見て血の気が一気に引いた。

「えっ……えっ!?!」

そこに映っていた自身の顔は、輿水幸子とは別人のものだった。確かにソツクリさんレベルで似てはいるし幸子基準の『カワイイ』レベルの顔ではあるものの、間違いなく別人。他でもない幸子自身が見間違える訳が無い。

と、ココでやつと『ドツキリかも知れない』事を思いだした幸子は、慌てて自分の顔をまさぐる。ドツキリならきつとこの顔は幸子を驚かす為の特殊メイクか何かだ。それなら何処かに繋ぎ目がある筈。そう思って顔じゆうを触るが、当然そんな物は存在しない。何かを顔に被っている感覚すら無いのだから当然だが。

「嘘ですよ？嘘……ですよ？」

きつと鏡に別人が映るように細工してあるに違いない。そう思いたい一心で、足下に落ちていた磨かれた金属片を掴んで覗き込む。

「ほら、やっぱりボクの顔はボクの……」

金属片が幸子の手から零れ落ちた。こんな何の細工も出来ないような欠片に映っていたのは、先程も鏡で見た幸子自身の顔とは別人の誰か。一体何が起こっているのか理解できずに呆然と立ち尽くす幸子に椅子を持った衣笠が改めて近づいてきた。

「ええと……弥生ちゃん、取りあえず座って落ち着いて」

へたり込むように椅子に座った幸子は「幸子です……輿水幸子」と返答するのがやっと。

「……幸子ちゃん？幸子ちゃんはこれから提督に会わないといけなのよ。その後これからの事を話し合おうか？」

気を使ってくれている様子の衣笠。「提督」というのが何者かは分からないが、衣笠の様子からして悪い人では無さそうではある。幸子は力無く頷き、衣笠に手を引かれその施設……工廠を後にする。

道中ふと幸子が外に目を向けると、艦艇が停泊できるくらいの大きな港のような場所、それとラジコンのような航空機が所狭しと並んでいる航空基地のような場所が見えた。それから、幸子と同世代くらいの少女達が陸上、海上で何かの訓練をしている様子も。海上の少女達は明らかに海の上を立ったまま滑っているが、今はそんな事は気にもならない。

「衣笠さん、あの……此処は一体何処なんですか？」

弱弱しく訊ねた幸子に、衣笠は丁寧な口調で「此処はショートランド泊地。海軍の基地よ」と応えてくれた。

海軍基地。思いもよらない答えが返ってきた。どうしてそんな場所に自分が居るのか見当もつかない幸子は、引かれるままに施設の中心部、ショートランド泊地の司令室へと辿り着いた。

ノックした衣笠が「入るよ、提督」と断りを入れて扉に手を掛ける。「ああ、衣笠か。分かった」という提督であろう向こう側の返事が聞こえた瞬間、虚ろだった幸子の表情に正気が戻る。思いきり力を込めてバンツ、と扉を開いた幸子は、司令室の最奥にある椅子に座る提督を睨む。と同時に幸子は安堵に包まれていた。

「……やっぱりドツキリだったんですね！そんな格好で何してるんですかプロデューサーさんっ!!」

椅子に座っていたのは海軍の制服らしき格好ではあるが、幸子が毎日のように一緒にいるプロデューサーその人。一体どこから『ドツキリ大成功』という看板が現れるのかと周りをキョロキョロしつつ、こんなに自分を不安に陥れた元凶である提督、もといプロデューサーを涙目で見つめている。

2話 幸子の一番長い1日（前編）

思い出してしまった。途端に幸子の身体はガタガタと震えだし、止まらない。あの時の絶望感と死の恐怖は、とてもではないが簡単に拭い去れるものではない。今まで幸子が挑戦してきた幾多の危険な口ケとは比較にもならない恐怖。

怖い、怖い、怖い……。今のこの身体に傷や痛みなど一切無いのだがそれでも怖い。

幸子を抱き留めていた衣笠に「ちよつと、幸子ちゃん!」と声を掛けられ、幸子は震えながらも漸く顔をあげた。

「衣笠……さん?」と呟くような微かなその声も震え、顔は真っ青。腰も抜けてしまつて自力では立つ事も儘ならない。

それでも「大丈夫。大丈夫だよ」と少し強く衣笠に抱き締められて、幸子は少しずつではあるが落ち着きを取り戻していく。今は何処にも怪我が無い事を思い出し、両足を何とか奮い立たせてやつとの思いで自力で立ち上がった。

「幸子ちゃん? 動けそう?」

「あつ……当たり前じゃないですか。ボクを誰だと思ってるんですか」

腰に両手をついて偉そうにしてはいるものの、半泣きで引き攣ったぎこちない笑顔を見せる幸子。その言葉が幸子の強がりだという事は提督も衣笠も分かつている。事実、その両足はまだ震えたままで暫くは自力で歩けそうもない。

どうやら幸子にこれからの事を話すにはまだ早いようだ。少なくとも、幸子の精神状態が落ち着いてからの方がいい。この状態でアレコレ話すのは幸子を混乱させるだけだ。提督はそう判断し、泊地内のある所へと通信を繋いだ。

『提督? なーに? 用事?』

通信に出たのは、少女らしき声。「悪いが直ぐに来てくれるか?」という提督に『はーい!』と元気の良い返事を返した通信の向こうの彼

女が司令室に到着するまでの時間、約5分。思っていた以上に早かった。

「提督、入るよー」と気楽そうな声と共に扉が開かれ、幸子の視線もそちらに向く。扉の向こうに現れたのは全体が茶色で毛先にグレーのグラデーションの入ったロングの髪に赤いヘアバンド、黒と白がベースのセーラー服をその身に纏い、何故か首から警笛を下げている美少女だった。

「あれっ？ 弥生ちゃん、元気になったんだね」

顔を見るなりそう声をあげたこの新たな少女に、前後の脈絡無く「フフンッ、当たり前ですよ、何せこのボクですからね！」と自身を鼓舞するように必死に取り繕う幸子。その幸子の様子を見て何かを察した少女が驚いた表情で提督の方に顔ごと視線を向けた。

「提督、弥生ちゃんって……」

「すまない白露。弥生を部屋まで運んでやってくれ」

白露、と呼ばれた少女は、フフンッと胸を張ってはいるがまだ震えの止まらない幸子を両手で抱き上げ「一先ずあたしの部屋に行こっか」とそのまま歩きだした。幸子は恥ずかしかったのか両手をバタバタさせて抵抗はするものの、白露の拘束からはどうやっても逃れられない。

「ちよつと！ 離してくださいよ！ ボクは自分で歩けますから！」

「ダーメ、こんなにガタガタ震えてるくせに」

そんなやりとりをして白露、幸子両名は司令室から退散。

残った提督と衣笠。提督は椅子に座ったまま、衣笠は部屋の真ん中にあるソファにポスンと腰掛けて、顔を見合わせた。

「どういう事だ？ あの弥生が」

「ねーっ？ 衣笠さんが言った通りだったでしょ？」

弥生という少女は本来、普段あまり喜怒哀楽を表に出さない少女だ。その表情から気分を察せられる同僚は多くはない。まだ着任して期間がそれほど経っていない提督には尚更、弥生の感情は普通は読

み取れない。

それが今はどうだろう。提督にもその心情が手に取るように分かる、というか分かりやす過ぎる。これは確かに衣笠や妖精達が言っていた『弥生だが弥生ではない』という言葉も頷ける。

「それで、提督はどう思う？衣笠さんは二重人格の類いじゃないかなっ、って思うんだけど」

「まだ分からないな。ただ、一つだけ確かな事がある」

果たして多重人格か、それとも別の何かなのは提督には分からない。しかしながら確かな事がある。それは、彼が提督たる所以。

「今の弥生は練度が初期の1だ」

提督の言葉に「……は？」と固まる衣笠。そう。提督のもつ資質の一つに『艦娘の練度を数値で正確に把握できる』というのがある。幸子はレベルでいう所の1、つまり最弱。

「ちよつとちよつと！冗談だよね?!弥生ちゃんってもうじき最高練度だったでしょ！」

衣笠が驚くのも無理はない。何せ『弥生という艦娘』は衣笠よりも古参、練度もこのショートランド泊地では上から三本の指に入る高さだった筈なのだ。それが、今はレベル1。過去に多重人格を発症した艦娘も居たには居たが、衣笠の記憶の範囲内では練度が変動した等という話は聞いた事が無い。

「いや、僕も驚いているよ。過去にそういう事例が有ったかどうか、も含めて弥生の事は明石に診てもらおう事にするよ」

ショートランド泊地には工作艦・明石は居ない。明石は普段は横須賀鎮守府所属、そこからあちこちの鎮守府や泊地に出張しているそれなりに忙しい艦娘だ。今回はタイミング良くその明石がショートランドに訪れる事になっていた。呉鎮守府の少将が視察に来るついでに一緒に。

「ああ、そっか。明石さんも来るんだっけ。でも提督の一番のお目当ては明石さんじゃないでしょ？」

途端にニヤニヤし始めた衣笠。提督も「何を言ってる。今は弥生の事の方が重要だろう？」と返してはいるが、その頬が少し赤い。凶星

を突かれたようだ。

「まったまたあ。ホラ、提督つては赤くなっちゃってるよ?」

「……………うるさい。衣笠も弥生の様子でも見てきたらどうだ?」

と。ここでタイミング良くというべきか悪くというべきか、通信が入った。相手は呉鎮守府一行のようだ。

『ちーっす! 呉艦隊旗艦、鈴谷だよ。あと1時間くらいで着くから受け入れ宜しくね!』

「あ、ああ。此方ショートランド泊地、了解した。沖立少将にくれぐれも宜しく願いますと伝えてくれ」

今回の呉の旗艦・軽空母鈴谷からの通信に応えた提督の声が若干上擦っていてトーンが高い。先程より一層ニヤニヤし始め「このっ、このっ」と提督の右頬を指でつつきからかう衣笠と、明後日の方角を向いて誤魔化す提督。やはりまだまだ新米のこの提督では衣笠には敵わないようだ。

衣笠と提督がそんなやり取りをしていた頃。白露に抱えられた幸子は部屋に連れ込まれ、そのままベッドに転がされた。「ギャフン」と思わず声が洩れる。

「ベツ……………ベッドに!?!ボクに何をする気ですか?!……………ハッ?!まさかボクがカワイイからってあんな事やこんな事をする気ですか……………!?!」

余程気が動転してるらしく、転がされたベッドの慌てふためく幸子。どこで覚えてきたのか「エロ同人みたいに!」と叫び白露を睨んでいる。

「いやいやいや、あたしノーマルだから。弥生ちゃん相手にそういう事したりしないよ?」

すっかり警戒し小動物のようにベッドの端で小さくなって睨みを利かせる幸子の姿に苦笑いしつつ、白露が少しずつ距離を詰めている。

遂に端に追い詰められた幸子の震える両肩にポン、と白露の手が置

かれる。「大丈夫だから。弥生ちゃん、落ち着いて、ね？」と笑いかけ
る白露にやつと少しだけ警戒を解いて「やよいさんじゃありません。
ボクの名前は幸子です」とか細い声。

「あー……えつと……幸子……ちゃん？」
「……何ですか」

白露は幸子を怖がらせないようにと慎重に言葉を選びながら会話を進めていく。幸子も少しずつ自身の事を話していく。

主に白露が聞いたのは、幸子が弥生として目覚める前の『輿水幸子』
についての事。中学生でアイドルで、このショートランド泊地の提督
とソックリなプロデューサーと共にトップアイドルを目指して悪戦
苦闘していた事。住んでいた土地の様子や、日本という国、世界の
国々の情勢（幸子の知っている範囲でだが）について。

「へえ……国と国が戦争……かあ」

白露が特に関心を持ったのはそこだ。幸子にはそれが不思議でな
らなかった。何故ならこのショートランド泊地は衣笠の話通りなら
ば海軍基地。海軍があるのなら当然この世界でも国同士の小競合い
や紛争、戦争行為がある筈だ。

しかしながら、幸子の疑問に白露は首を横に振る。「あー、この世界
で国対国で戦争なんてしてたら人類はとっくに滅んでるよ」というの
が、白露の答え。

白露はもはや幸子が弥生とは別人という事を受け入れたようで、啞
然としている幸子にも分かりやすく説明してくれた。この世界には
『深海棲艦』という異形が存在していて、その海の化物からの侵略から
人類を守る。それが、白露達のような各国海軍所属の『艦娘』の役目
だ。

幸子は漸くだが理解してきた。つまり幸子は最近よく目にしてい
た『異世界ものの主人公』にされてしまったわけだ、と。

ズーン、という言葉がピツタリの様子で酷く落ち込んだ。確かに異
世界に来てしまったとか、向こうの世界でのトップアイドルになると
いう夢も志半ばだとかはある。けれどそれ以上に辛い事だつて幸子
にはある。

「じゃあ、ボクはもう戻れないって事なんですかね……」

えらく沈んだ様子の幸子を見兼ねたのか「だっ……大丈夫だよ！
きつと戻る方法もあるって！」と慰めの言葉をかける白露。幸子は一瞬だけ反応して視線を向ける。

「……本当に？」

「きつとあるって！あたしもできる限り協力するから」

確かに辛い事に違いはない。しかし、クヨクヨしていても何も始まらない。訳の分からない化物が存在するような世界だ。もしかしたら元の世界に戻る方法だってあるかも知れない。可能性がゼロでない限りは、やってみる価値はある。

「分かりました。きつと神様だってボクの事を見捨てたりはしませんよね」

持ち前のポジティブ精神を奮い立たせる。どうせこのままで居ても帰れないのなら、此方から動くしかないのだ。そう思って、幸子はベッドの上で立ち上がった。

「こうなったら……やれるだけの……事はやってやりますよ！大丈夫です。何せボクは……輿水幸子……なんですから！見てくださいいよー！」

とはいえ、幸子の精神が相当に参っているのは白露にも分かった。何故なら幸子のその声は悲しみで震え、顔は辛そうで見えていられないくらい、瞳からはポロポロと大粒の涙を流しているのだ。どれだけ絶望的な事に挑もうとしているのかが白露にも手に取るように分かった。そうでもして奮い立たなければ、幸子の心が潰れてしまうのだろう事も。

だから白露は、敢えて幸子の決心に乗ることにした。幸子独りで失敗を繰り返し塞ぎ込んでいくよりはマシだろう。

「うん！頑張ろうね、幸子ちゃん」

両名の決心は兎も角。異世界だろうが何だろうが、生きている限りお腹は減る。『入渠』し幸子として目覚める前からこの弥生の身体は食事を摂っていない。思いきりグウグウと鳴った幸子のお腹。幸子自身は真っ赤に、白露は鳴った幸子のお腹に視線を向けたあと、苦笑

い。

「ですがその前に何か食べるモノを……」

「あつ、幸子ちゃん。それなら今は軽い物にしておいた方がいいよ」

白露が言うには。もうじき呉の艦隊が到着、その艦隊の運んで来た荷物の中に『間宮』の甘味がたんまりとあるらしい。当然嘗ての大戦の知識など中学の授業レベルしか無い幸子にはその意味が分からない。甘味、つまりスイーツが運ばれてくるというのは分かるが。

「白露さん、待ってくださいよ……つまりココでは甘味を手に入れるのも苦労するって事ですか!?!」

アイドルとはいえ今時の少女である幸子にスイーツの無い生活など耐えられる訳が無い。幸子は今度は別の意味で絶望の表情を見せ、ベッドの上で四つん這いになって肩を落とした。

「無理です……スイーツ無しの生活なんて……幾らボクでも無理です……」

勿論、白露の説明によって誤解は直ぐに解ける。「そんな美味しいスイーツが!?!」と幸子の瞳は暫くの間キラキラと輝いていた。相変わらず喜怒哀楽の分かりやすいアイドルである。

3話 幸子の一番長い1日（後編）

ショートランド泊地、その食堂。その最奥に陣取り向かい合って座った幸子と白露。テーブルの上にはパンケーキ（二人前分）。それをフォークで口に運びつつ、紅茶を嗜む。幸子にとって今日一日でやっと落ち着けた時間だ。何せ元の世界で学校の終わる夕方まで過ぎ、此方の世界に來たのが正午過ぎ。体感ではとくに24時間を過ぎたように感じる。そんな（精神的に）疲れた幸子を癒してくれる物は、やはり甘いものと美味しい飲み物だ。

「それにしてもこの紅茶、美味しいですね」

幸子が今飲んでいる紅茶は、この食堂のものではない。白露が自室から持ってきて淹れたもの。白露曰く「熊野さんに貰った茶葉」だそう。熊野なる人物はショートランド泊地には居ないそうなので、彼女が何者なのかは幸子には分からない。白露が言うには熊野は呉鎮守府所属の艦娘。前回の視察に同行してきた時に白露に紅茶の茶葉をくれたのだという。

「熊野さんってイイ所のお嬢様らしいんだよね」

お嬢様。艦娘というものがどういふものなのかはまだ幸子にはピンとこないが、何不自由なく過ごせそうな立場を棄ててまで海軍に入り艦娘となる必要性を見出だせない。

「お嬢様って……どうしてそんな人が海軍に居るんですか」

疑問はあるものの、白露もそこまで聞いた事はないらしい。「うーん、聞いた事なかったなあ」とパンケーキをフォークで刺して、一口。

幸子もカップに入った紅茶をまじまじと見つめる。コンビニに売っているペットボトル入りの紅茶や、プロデューサーとたまに行くファミリーストランのものとは明らかに違う。出演番組で一度飲んだ事のある高級紅茶の味や香りに似ている。

「全く、プロデューサーさんもたまにはこういう高い紅茶をボクに飲ませ……」

無意識に口にしたが直ぐに気付き、言葉に詰まった。確かにプロ

デューサーはファミリーレストラン等には連れて行ってくれたり（安い等の意味）はするものの、こういうった高級な物を出すような店には連れて行ってはくれなかった。プロデューサー側からすれば周りに勘違いされたり変な記事にされない為の行動なのだが。

幸子は「もつとこう、ボクに見合つた高級なお店に連れて行ってくられてもいいんですよ?」と不満を口にしたりした。ただ、二人で食事をしたり下らない話をしたり。プロデューサーとのこういった時間は……嫌いではなかった。

（帰りたい。プロデューサーさん……）

そんな、プロデューサーとのやり取りの数々がひどく昔の事のように感じられた。ここで家族ではなくプロデューサーの事が思い浮かんだ幸子の心情は察してあげて欲しい。

「そうだ幸子ちゃん!」

言葉を途中で噤んだ幸子の心境を察してか、白露が話し出した。我に返って顔をあげた幸子は、心を静めると気持ちに誤魔化す為に紅茶を一気に飲み干す。

「何ですか?」

「これから『少しの間』滞在する施設なんだし、折角だからあたしが泊地を案内してあげる!」

こんな状況、異世界の住人などと訳の分からない事を話す自分を信じてくれた上、気まで使ってくれる。辛さと寂しさで一杯だった幸子が白露に信頼を置くには充分だった。「ありがとうございます」と思わず涙を浮かべ頭を下げた幸子に白露は「いいっていいって。あたしお姉ちゃんだからね!」と笑顔を見せる。

「じゃあ幸子ちゃん、行く……つと、これ食べてからでいい?」

手を引き立ち上がった白露が、まだ半分程残るパンケーキに視線を送る。思わずクスツ、と吹き出した幸子は涙目ながらもやつと少しだけ元気を取り戻した。

「そうですね。ボクももう少し食べたいですし。あ、紅茶のお代わり貰えますか?」

暫し談笑しながらパンケーキを食べ終えて、二人は泊地内の主要な

施設を見て回った。この泊地、基本的に外に出なくとも大丈夫なように一通りの施設が入っていた。居住施設部分はさながら大きな病院のよう。必需品の販売店、コンビニ、衣類等の販売店等。勿論ランドリーもある。幸子が最も興味を示したのは、その中でも大浴場……幸子が目を覚ました場所である『入渠施設』と呼ばれる場所だ。

「えっ!? どんな怪我でも完治するんですか?」

「うん、『艦娘なら』って言葉が付くけどね。現に幸子ちゃんが目覚める前……『弥生ちゃん』も瀕死の重症だったんだよ?」

ただ、驚いた。この施設ならば、どんなに重い怪我でも通常有り得ない速度で回復するというのだ。流石は異世界。魔法……とはいかないようだが何でも有りである。この温泉の大浴場のような施設を呆然と眺める。

「凄いですね……」

「……っと、そうだ。そろそろ呉艦隊が着く時間だよ」

思い出したように口にした白露に半ば強引に手を引かれ、二人は泊地の港へ。艦隊、という言葉で幸子が想像したのは、当然ながら巨大な軍艦が幾つも海上を走る姿。初めて見るであろう本物の軍艦に興味を惹かれソワソワしながら到着を待つ。

「どうしたの? そんなにソワソワしちゃって」

「しっ……してませんよ! このボクがこの程度でソワソワなんてするわけ無いじゃないですか!」

凶星を突かれ慌てて顔を真っ赤にする幸子に「ハイハイそうだね」とそれをあしらう白露。二人がそんなやり取りをしている間に、海に向こうに小さい影が見えてきた。

「あれが呉艦隊……ですか……? あれが?」

幸子の疑問も無理は無い。白露は『艦隊』と言った筈なのに、見えるのは駆逐艦(と言っても幸子は駆逐艦という艦種が有る事すら知らず、艦艇Ⅱ軍艦Ⅱ戦艦、という認識しかない)一隻のみ。もっと沢山の軍艦が現れ映画のような迫力のシーンが見られると思っていた幸子は、ハッキリと言えばガツカリしていた。

「軍艦一隻しかないじゃないですか……」

「ほら幸子ちゃん、よく見て」

言われるままに目を凝らすと、その駆逐艦を囲むように海上に人影が見える。近づくにつれてそれが海上をまるでスケートのように疾走している人間であると分かり、今更ながら驚いた。彼女達は船の一部のような機械的な何かを身に付け、明らかに自身の意思でコントロールし海上を走っている。

「何ですかあれ!?船と同じ速度で人が海の上を走ってますよ!」

「フーン。幸子ちゃん、あれが『艦娘』だよ?」

その海上を走る六人のうちの一人、先頭にいた人物が白露に気付いて右手を振る。エメラルドグリーンの長い髪にブレザーの制服に、明らかにボウガンに見える物を持った綺麗な女性。軽空母鈴谷である。

「あの人もカワイイですね……まつ、まあボクの方がもつとカワイイですけどね!」

「アハハハハ……」と白露に苦笑いで流され、ムツとしながらも鈴谷達の行方を目で追う。駆逐艦を輪形陣で護衛しながら(この時点では幸子には輪形陣は分からないが)走る6人の艦娘は、そのまま泊地の港の奥へと進んでいく。

「ちよつとみんなと話して行こうよ」

「いえ、ボクは、あの」

白露に押し切られる形で、接岸するであろう位置まで走る羽目になった。それにしても確かに体格差があるとは言っても、白露の力はその細腕、華奢な身体(一部分幸子より明らかに大きい所もあるが)からは想像できない程に強い。これも艦娘だから成せる業だろうか?

「はあつ、はあつ、はあつ、はあつ」

無理をして走った為、幸子は息も絶え絶え。下を向き膝に両手を付いてその場で停止している。一方の白露はといえば、全力疾走をしたにも関わらず大して息を乱してはおらず平然としている。幸子から見れば白露も充分化け物だ。

二人が着いた時には既に他の艦娘は陸へと揚がっており、残っていたのは二人。そのうちの一人が白露達に近づいてきた。

白のブラウスに赤紫のミニスカワンピースにブルーのリボンタイとい

う白露とも鈴谷とも衣笠とも違う制服、長い茶髪を山吹色のリボンでポニーテールに纏めた、幸子と同じ位に見える年頃のこれまた美少女。

「白露に弥生じゃない。珍しい組合せね」

そう声を掛けてきた少女に「うん、他のみんなは遠征に行ってるから」と返した白露に、幸子は小声で「この子は？」と尋ねてみる。白露も小声で「風雲だよ」と教えてくれた。

「何よ白露も弥生も。私の目の前で内緒話？」

「うん、ちよつとね。ねっ？『弥生ちゃん』？」

弥生、と振られて幸子は慌てて首を縦に振った。何故かは分からないが、この場では余計な言葉は発しない方がいいと思ったのだ。

「ふーん、そうやって内緒にするんだあ……」と若干膨れて見せた夕雲型駆逐艦三番艦・風雲。彼女が更に一言発しようとした瞬間、幸子達三人を睨む鋭い視線に気が付いた。

「なっ……なんですかあの人は？何であんな恐ろしい視線を……」

幸子にこれまた小声で教えてくれた白露に依れば、あの鋭い視線の主は不知火。半袖のブラウスに黒のベスト、黒のミニスカートにスパッツ。艦橋型の髪止めと白のリボンでピンクのセミロングの髪をポニーテールに纏めた（鋭い眼光さえなければ）美少女。そのあまりの眼光に幸子は思わず目を逸らしてしまった。

「風雲、そんな所で油を売っていないで少佐に挨拶をしてきなさい」

不知火に「はい」と気の抜けた返事を返した風雲の様子に、幸子一人が焦る。あんな怖そうな艦娘にそんな態度をとって大丈夫なのだろうか？と。

そんな幸子を知ってか知らずか、不知火は風雲に向けていた視線を幸子と白露に向けた。幸子の身体が思わずビクツと震える。

「……白露達もこんな所に居ずに戻ったらどうですか」

不知火はそう言うのと回れ右。横付けされた駆逐艦の方へと歩きだした。

その駆逐艦から、一人の女性が降りてくる。海軍のもの、と思われ

るあのプロデューサー似の泊地の提督と同様の制服を身に纏い、肩の下辺りまでありその毛先に赤みがかつたグラデーションのある長い金髪、に赤い瞳を持ち、遠くから見ても分かる整った顔立ちの美人。幸子も思わず見とれてしまった。こんな感覚は久しぶりだった。幸子の世界で今やトップアイドルとして君臨している『銀色の王女・四条貴音』に初めて会った時以来だ。ただ、制服の上から見ているので詳細は分からないが、彼女の左腕は欠損しているように見える。

「白露さん、あの人は？」

「あ、あの人は呉の沖立海軍少将だよ」

「……え？」と思わず固まった。あんな人が危険な海軍に入らなければならぬ程に、今の日本という国は逼迫している状況なのか、というのもあるが、あの若さで少将という立場にいるというのにも。それに。

(世界はやっぱり広いですね……でもボクも本職アイドルとして負ける訳にはいきませんね)

少しだが、幸子の心が前を向けた気がした。そうだ、こんな所で止まっている場合ではない。異世界ですらこれなのだ。早く元の世界に戻ってアイドルとして切磋琢磨しなければ。そう思えた。

口元にうつすら笑みを浮かべ、決意も新たにされた幸子。その視線の先の少将と歩く不知火の表情が、先程迄より少しだが柔らかくなっている事に気付いた。不知火は手袋を外しており、その左手薬指に指輪を填めている。

(……指輪？あの歳で結婚してるって事ですか??んんっ?)

幸子がその指輪……『ケツコンカツコカリ』を意識するようになるのは、もう少し後の事になる。

4話 検査

再びショートランド泊地工廠へと向かい通路を歩く幸子の頬はこれ以上無いくらい膨らんでいる。その表情は、明らかに不機嫌。「あの人は何なんですかっ！沖立さん相手にあんなにデレデレしちゃって！」

幸子の不機嫌の原因は提督である。沖立少将に会う前からソワソワし始め、いざ対面したらしたでやたらとおべっかを使い、幸子のプロデューサーでは見たことも無いような笑顔で、とてもではないが軍人とは思えない態度だった。

「まあ仕方ないんじゃない？提督は沖立少将の前でだけは何時もあんなだし。悪い人ではないんだけどねー」

白露も呆れ気味に答える。この泊地の艦娘達からすれば見慣れた光景らしい。簡単に言えば、この泊地の提督は沖立少将の事が好きらしい。

「でも不知火さんに睨まれて沖立さんから引き離されましたよね！ザマーミロですよ！」

あまりのだらしなさっぷりが癪に障ったらしく、提督と沖立少将の間に不知火が割って入り「少佐、くだらない事はその辺にしてさっさと仕事を片付けてしましましょう」と睨みを利かせていたのだ。不知火の姿はまるで主人に悪い害虫（敢えて害虫と表記した）が近付かないように威嚇している忠犬のようだった。

プンスカ、という表現がピツタリな様子の幸子。白露はその様子を繁繁と見つめて、突然ニヤニヤし始めた。

「ふーん……もしかして幸子ちゃん、提督みたいな人が好みだったりする？」

途端にそれに大袈裟に見えるような態度で慌て始める幸子。「なっ、なっ、何を言ってるんですか！ボクはプロデューサーさんの事なんて好きでも何でも決まってるじゃないですか！最高にカワイイボクにはプロデューサーさんじゃ釣り合いが取れませんからね！」と声を上擦らせながら早口で捲し立てている。もう自白してい

るのと変わらない。

「そっかあ。幸子ちゃんはそのプロデューサーの事が好きなんだね」

「そっ、そっ、そんな訳無いじゃないですか白露さん！」

慌てて否定はするものの、幸子の頬舐か耳まで紅い。やはり別人とは言えプロデューサーが他の女性にデレデレする光景は気に入らなかったようだ。と同時に、白露は『幸子が弥生とは別人』という事実を改めて認識し、その苦笑いの中に陰りを見せる。提督に恋愛感情を一切持つていかなかった弥生とは明らかに違う。やはり幸子は『弥生ではない誰か』なのだ。

工場に着いた二人。白露がその扉を開くと、一人の女性が入口近くに置いてある椅子に座っていた。彼女は幸子達に気が付くと、立ち上りゆっくり近付いてくる。

「話は衣笠さんと少佐から伺ってますよ。さあ『幸子さん』、どうぞ此方へ」

一部をおさげにしたピンク色の長い髪、赤いリボンの付いたセーラー服、腰回りの露出した行灯袴を詰めた少々扇情的なミニスカートの、これまた美人。幸子に近付いて手を伸ばしてきた彼女は工作艦・

明石。

「……どうして『艦娘』っていうのはイチイチカワイイんですか？」

明石を視界に捉えボソツと白露に溢す幸子。外で訓練をしているショートランドの艦娘達も、呉の艦娘達も。白露の事も含めてここがアイドル事務所だと言われても信じてしまう程にレベルが高い。なんと言うか、異世界は美人しか存在していないのかと錯覚してしまう。

「考えた事無かったなあ……艦艇の魂の作用とかかな？」

それに小声で答えてくれた白露にも、理由は良く分からないらしい。というより幸子に今指摘されてやっと認識したレベルのようだ。

小声で会話したつもりだった二人のやり取りはしかし明石に聞こえていたらしい。「艦艇の魂に関しては艦娘の事と一緒に説明しますね」と笑顔で話す明石の様子に幸子は「あ、えっと、あの」と言葉に詰まる。

「大丈夫ですよ幸子さん。私は大抵の事には驚いたりしませんから」
工作艦だけあって色々なケースを経験しているらしい明石が幸子の右手を掴み、引つ張る。その瞳は幸子を心配しているというよりは好奇心に満ちた輝きを見せている。明石にとって今の幸子は新しい研究材料か何かに見えているのだろうか？

幸子も流石にそれに気付き、ビクツと身体を震わせて思わず右手を引いた。すると思つたより簡単に明石の手を振り解く事が出来た。白露の時はどうやっても拘束から抜け出せなかったのに。幸子自身も思わず拍子抜けしたくらいだ。明石の方が大人なのだから当然白露よりも力が強いと思つていたのだ。

「あれっ？えっ？どうしてですか？白露さんの時は抜け出せなかったのに……」

「ああ……それは私が工作艦だからですよ。それも含めてゆっくり説明しましょうか」

幸子の一言だけで大方の事を理解したらしい明石が改めて幸子の手を握る。今度は振り解こうとせずに引かれるままに歩く幸子。「そうだ、白露さんも念の為に一緒にどうぞ」と明石に言われた白露もその後引き続き移動。

工廠の最奥にある扉の向こうに通された幸子が見た部屋は、医療施設のような場所だった。何やら良く分からない医療器具の類いが所狭しと置かれ、真ん中にベッドが一つある白い壁紙の部屋。いや、医療というよりは人体実験というべきなのか？ただ、幸子の居た元の世界と決定的に違うのは、それらの器具を使うには妖精達の力が必要という事だ。

明石に言われるままに、不安ながらもベッドに横になった幸子。その幸子の身体の周りに妖精達が集まってきた……両手足を拘束してベッドに張り付け状態にされた。暫し呆気にと取られていた幸子は拘束が終わった頃にやっと我に返ると声を張りあげた。

「……どうして拘束するんですかっ!?ボクに何をする気ですか!」
「血を少し抜いたりちよつとデータを取ったりするだけですよ。大人しくしていればちよつと痛い程度で済みますからね?」

両手に医療用の手袋を填めて笑顔で答える明石の様子に、ジタバタと暴れ逃げようとする幸子だが、思った以上に拘束が確りして抜けれない。「大丈夫だよ幸子ちゃん。あたしはずっとここに居るからね」と右手を握り締めてきた白露に「白露さんの裏切り者!!」と叫ぶも当然ながら拘束はそのまま。

注射器の針を幸子に向ける明石に気付き青褪める幸子の右手に、妖精が一人近づいてきてアルコールを含んだ脱脂綿で肘の内側部分を拭いてきた。駆血帯が幸子の肘の少し上のところに巻かれて、注射器の針が近付いてくる。

「ヒツ……やっ、止めてください!」

恐怖で涙を浮かべ首を横にブンブンと振る幸子だが、明石がそれを聞く様子は無い。「すぐ終わりますから。はい、ちよつとだけ力を入れてくださいね」と満面の笑みの明石の様子に、幸子は思わず全身に力を入れて目を瞑った。

チクツ、と針が右手に刺さって、「ヒイイツ!」と情けない声をあげた。このまま血を抜かれ続けて死ぬのか、それとも何か投薬されて実験体にされるのかと恐怖に慄く幸子だが、針は直ぐに抜かれた。恐る恐るで右目だけ開いて見てみると、注射器の中には幸子から抜いたであろう血液が20ml程。

「……へっ?」と声を洩らし安堵で全身から力が抜けた幸子の様子を見て、明石は苦笑い。

「幸子さんは注射は苦手でしたか?怖がらせてしまつてすみません」

本当にサンプル用に少し血を抜かれただけだと理解した幸子は声を荒らげる。「血を抜くだけならそう言ってくればいいじゃないですかっ!!」とまだ涙の流れる瞳で明石を睨みつけた。これではまるで注射が怖くて駄々を捏ね泣きわめく小学生のようではないか。白露も何やら温かい視線を幸子に向けているし、相当に恥ずかしい。

「……注射が怖いわけじゃないですよ!ボクはもう14歳なんですからね!」

泣きながら震えた後ではこれも説得力は皆無。白露と明石には完全に『幸子は注射が怖い御子様』と思われている。

「ハア……もういいですよ。それより検査終わらせて下さいよ。ボクも早く拘束から開放されたいんですから」

諦めて溜め息をついた幸子だが、「分かりました！それじゃチャツチャと終わらせてしまいましょうか！」とやる気の戻った明石が何やら使い道の分からない道具を手を持ったのを見て、泣きながら再びジタバタと暴れ始める。両手足首を拘束されている為、当然ながら逃げられない。

「ここからは少し痛いかも知れませんが……幸子さんも今は艦娘のようですから大丈夫ですよ」

「明石さんっ、それどういう意味ですか!?!ヒイイツ!?!助けて下さい!助けて白露さん!!」

恐怖で表情を引き攣らせ白露に助けを求めるも、白露が割り込める事ではない。右手を握り締めて「大丈夫だよ幸子ちゃん、あたしは終わるまで傍にいるからね!」と励ましてくれるのみだ。

「止めてくださいっ!!助けてっ!!」という幸子の叫びを残して、明石と妖精達による検査は肅々と進められた。



涙の流れた跡を頬に残し、余程怖かったのかベッドの上で白目を剥いて失禁して気絶している幸子を横目に。明石が検査の後片付けをしていた。白露も大丈夫とは分かっているが幸子の様子は心配ではあるので、念のために確認はしてみる。

「明石さん、幸子ちゃん気絶しちゃってるけど……」

「大丈夫ですよ、今はただ気を失ってるだけです。それより困った事になりましたよ」

明石と妖精達の検査の結果解った事は、幸子はけっして弥生の別人格では無いという事。幸い『艦娘・駆逐艦弥生』としての力はある事。それから。

「これが一番の問題ですよ。人としての弥生さんの魂がああの中には存在していません。今ああの中には『艦艇・駆逐艦弥生』の魂と、『輿水幸子なる人物』の魂のみです」

「明石さん、それって……」

この世界で、艦娘は二つの魂を持っている。一つは人間の、その人物そのものの魂。もう一つは艦娘の力の元である艦艇の魂。明石で言うなら人間（人間としての艦娘の本名は軍の機密事項の為公表されない）の魂、それと実際に存在していた艦艇・工作艦明石の魂の両方をその身体に内在している。

なので、本来なら弥生ならば人間の弥生の魂と艦艇・駆逐艦弥生の魂を内在してはならないのだが、今はその人間の弥生の魂の代わりに輿水幸子の魂が存在している。

「白露さん、確か弥生さんは入渠前に……」

「うん。レ級が出現したから迎撃に向かつて……」

シヨートランド泊地の近くには、何故か時々戦艦レ級という強力な深海棲艦が発生する。そのレ級の個体が特別な何か、という訳ではなく、どうやら量産型の類いのものようだが。今回弥生は何時ものように僚艦達とレ級の迎撃に向かったのだが、運悪く大破し意識を失った。もっと正確にいうなら、弥生は本当なら轟沈して海の底に沈んでいる筈だったのだ。今、当に沈むという所で僚艦に間一髪引き揚げられ、駄目元で入渠させられたのだ。

「その時に、弥生さんの魂は既に無かったのではないのでしょうか？」

「つまり……弥生ちゃんはその時死んだって事？」

白露も信じたくはない。弥生はレ級にやられ本来なら死んだ筈などとは。だが、そう説明されるしか今の状況は納得出来ない。もうすぐ最高になる筈だった練度が1に戻り、人間弥生の魂が無く代わりに輿水幸子の魂が存在している。どういう理屈かは分からないが、弥生の魂が抜けた拍子に何処からか幸子の魂が入った、そう考えるとしくり来てしまう。

白露は複雑な思いで幸子を見つめる。これからどう接していけば良いものか。いや、白露はまだいい。問題は弥生と特に親しかった僚艦が、弥生が亡くなり、更には姿が弥生と同じこの幸子と仲良く出来るのかという事だ。

「……取りあえず着替えさせなきゃね」

隣であれこれと思考しているであろう明石を横目に、白露は弥生の

部屋へと着替えを取りに走っていった。

5話 衝撃

『気持ちには分かるけど急ぎ過ぎだよ！』

僚艦である陽炎型駆逐艦18番艦・舞風からの通信を無視。抱えていたドラム缶は同じく僚艦である陽炎型15番艦・野分に押し付け、自身は最大戦速で泊地へと走る。

早く帰投したい、もつと、もつと速く。逸る気持ちは抑えられないが、彼女の速度では37・25ノットが限界。

泊地の提督からの通信は、遠征に出ていた彼女達にも届いていた。

弥生が目を覚ました。

彼女が急ぐにはそれだけで十分な理由だった。

嘗て、彼女の所属していた艦隊はある海域で深海棲艦の襲撃に遭い、僚艦の殆んどを失った。忌々しい鬼級の化け物、空母水鬼率いる大艦隊に囲まれたあの状態から彼女が生き延びたのは奇跡だ。

その件の後、所属していた鎮守府を自らの希望で離れ移ったショーランド泊地。僚艦を失う事を酷く恐怖しトラウマとして抱えてしまった彼女を支えてくれたのが、当時ショーランド泊地に先に着任していた弥生だった。口数が多いわけではなくあまり感情を表に出さない弥生だったから良かったのかも知れない。自分の事を気遣ってくれつつも、その当時では有り難い程度の距離を取ってくれていた弥生に、彼女は次第に心を開きトラウマも癒えていった。

その。その弥生が。運が悪い、と言ってしまえばそれまでだったが。弥生がレ級との一戦で瀕死の状態で帰ってきた時は目の前が真っ暗になった。何せ、その時弥生の身体はまるでボロ切れのようにズタズタで心肺停止状態だったのだ。本当なら水底に沈んでいた筈の弥生をすんでのところで海中から引き揚げたうえ陸に揚がってからも入渠までずっと心肺蘇生をしてくれた龍驤には頭が上がらない。

やがて彼女は泊地の港に着き、放り投げるように艀装を外した。目指すは工廠の奥。身軽になった彼女は、身体の検査を終えた弥生が休んでいる部屋へと脇目も振らずに只管に走る。

ただ一つ問題があった。弥生の身を案ずるあまりに、彼女には提督からの通信の後半部分が耳に入っていないなかつたのだ。彼女が聞いていなかったその部分こそ、弥生の身に起こった変化。つまり……。

「……弥生!!」

ボタンツ、と勢いよく開けた扉の部屋の中にはベッドの横に立つ明石と、何故か全身シートに包まり椅子に座っている弥生の姿。明石の方はそんな事はないが、弥生は少し驚いた表情で此方を見ていた。

「弥生……良かったっぴょん!!」

勢いのままに弥生に飛び付き抱き着いた。弥生は体勢を維持できずにそのまま椅子から落ちて、抱き合った状態のまま三回転程右方向に転がった。

「卯月さん、落ち着いてくださいよ」

「明石は黙ってるっぴょん! うーちゃん達の感動の再会を邪魔しないで!」

抱き合って横になったままの体勢で、明石を睨む。しかしその視界内にふと違和感を感じて直ぐに明石から視線を外し弥生に向けると、弥生は包まっていたシートが開け、肌色が露出している。弥生は見られたのが恥ずかしかったらしく、顔を紅くしている。それを確認すると彼女……睦月型駆逐艦四番艦・卯月は、再び明石を睨んだ。

「弥生に何をしたっぴょん!? 明石でもやって良い事と悪い事があるっぴょん!!」

「何を……検査をしただけです。それに彼女が服を着ていないのは失き……」と言いかけた明石を遮るように、卯月の目の前の弥生……幸子が慌てた表情で大声をあげた。

「うわーっ!? 違いますよっ、違いますっ! ちよつと暑かったから脱いだだけですからね! ボクが失禁なんてする筈ないじゃないですかっ!!」

今起きた出来事に理解が全く追いつかず、卯月は呆然として停止していた。

あの弥生が感情をこれだけ大袈裟なくらいに露にし、初めて聞く程の音量を出している。これで驚かない訳はない。

暫しの間。やがてハツとある事を思い立った卯月は、弥生を抱き締めたまま起き上がると、そのままゆつくりと明石から距離を取る。

「……弥生に一体何をしたっぴょん!!」

「ですから検査だけですって」という明石の言葉は信じられない。弥生が動けないのを良い事に、きつと何かの実験体にしたのだ。そうでなければ今の弥生の状況は説明できない。そう思い込んで卯月は明石を睨んだままジリジリと扉の方へと後退していく。

非常に不味い雰囲気だ。幸子にもその位は分かる。目の前のこのピンク色のロングヘアの『卯月』なる少女は恐らく、『弥生』の親友だったのだろう。今の状況を説明しない訳にはいかないが、あまり刺激するのも良くないかも知れない。

「えっと……そっ、そうだ!もう少しで白露さんが戻ってきますから!卯月?さんも少し落ち着いてください。取りあえずボクから手を離してください」

幸子の言葉を聞いた卯月の表情が再び固まり、明石に一層鋭い視線を向けている。まずった。幸子が喋れば喋るだけ事態が悪化しそうだ。

「悪戯にも限度があるっぴょん!」と今にも明石に噛み付きそうな卯月を一先ずどうにかできないものか。焦る幸子と卯月の足元に、妖精達が集まって来ていた。明石の言葉は信用せずとも、艦娘にとって重要な妖精達の話なら聞く耳を持つかも知れない。幸子はそう思っている。ここは妖精達に頼る事にした。

結果として、幸子の判断は正解だった。卯月は妖精達の話と言えども最初は「まさかうーちゃんをドッキリに嵌めるつもりっぴょん!」と疑っていたものの、最後には納得したようだ。しかしながらその卯月の表情は暗く。その視線は焦点が合っておらず、その場に座り込んでいる。

「仕方ありませんよね……すみません」

何と声を掛けていいか分からず、バツが悪い幸子は思わず謝ってし

まった。幸子だって本来被害者だ。しかしながら卯月が落ち込んでいる原因は間違いない。幸子にもある。その後ろめたさから、ついその口にした。……だが、これが善くなかった。

卯月の視線が幸子に移り、焦点が合う。と同時にフラリ、と立ち上がった卯月は真つ直ぐ幸子の正面へ。

瞬間。幸子の首に卯月の両手が伸びた。そのまま持ち上げられて、地面から足が離れる。卯月の両腕に力が入れられて、幸子の首が絞まる。

「くっ……苦し……」とだけ声を洩らし、幸子は卯月の両腕を振りほどこうと必死に手で掴むが、全く敵わない。徐々に絞まっていく首、苦しい呼吸と感じた事の無い痛み。このままだと確実に絞め殺される……。声も出せず、心の中で必死に助けて、助けてっ、と懇願する事しか出来ない。

「卯月さんっ！何してるんですかっ……きゃアツ」

助けようと向かってきた明石だが卯月に呆気なく撥ね退けられ、機具類の並んだ陳列棚に突き飛ばされてしまった。勢いよく突っ込んで倒れた明石の上に機具類が落ちて散乱、傷付きあちこちから血を流し倒れたまま、明石はその場から動けそうにない。

「お前がっ！お前が悪いっぴょん！お前が居なくなれば！お前の魂が消えれば弥生が戻って来れるっぴょん!!!」

一層強くなる卯月の握力。駄目だ、このまま絞め殺される。幸子がそう覚悟した時だった。ドサツ、と何かが落ちる音。辛うじて視線だけをそちらに向けた幸子の視界には、床に落ちている着替えの入った紙袋、それと黒と茶色の何かが突っ込んでくるのだけが辛うじて映っていた。

次の瞬間。突然首の苦しみから開放されて、幸子の肺に空気が戻って来た。相当な痛みの残る首を押えつつ、「ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ」と咳き込み幸子はその場に踞る。

「幸子ちゃん、大丈夫!？」

間一髪。助けてくれたのは戻って来た白露。見れば卯月は床に倒れ伸びている。まだ動けない幸子は白露に抱き上げられて一先ず

ベッドへ。明石も白露に肩を貸してもらって何とか立ち上がって椅子に座っている。

危うく今度こそ本当にあの世に行かされる所だった。卯月の気持ちも少しは分からないではないが、流石に行き過ぎだ。洒落にもならない。

「白露……さん……あり……が……と……う……ご……」

「喋らなくていいから。入渠しに行こう。ね、幸子ちゃん」

白露と妖精達によって卯月は営倉へ。1週間の禁固と、幸子に決して手を出さない旨を誓約。幸子は明石と共に再び入渠施設へと戻る事になった。



「本当に殺されるかと思いましたよ……」

再び入渠施設の浴室。そう洩らした幸子は明石の右側に並んで湯槽に浸かっている。

「幸子さんも災難でしたね。卯月さんも……本当はあんな事する子じゃないんですけど」

とは言え、卯月の事は幸子にとってトラウマになりそうではある。今でも卯月のあの表情を思い出すだけで身体が震える。正直、顔も見たくない。

はあ、と溜め息をつき顔をあげた幸子は、先程絞められた首の辺りをさすってみる。もう痛みは無い。自分では見えないので分からないが明石に依れば『入渠のお陰でもう首のアザになっている部分は完治した』らしい。明石の身体に出来ていた傷や打ち身、それに彼女の右頬に出来てしまっていた普通なら恐らく残ってしまうであろう大きな傷も完治している。

本当に有り難いシステムである。

「ボクにも艦娘の力があって本当に良かったですよ」

フウ、と大きく息を吐いて両手を前に突き出し全身で伸びをする。取りあえず艦娘の力があって助かったが、さてさてこれからどうする

か。親族や同じ事務所のみんな、それにプロデューサーだつてきつと心配している筈。出来るなら一刻も早く元の世界に戻りたい所だが、肝心の手段が分からない。都合良く幸子の魂だけが元の世界に戻れる方法などあるのか？それに幸子の魂が元の世界に戻れたとしても幸子の身体に戻れる保証など無い。ヘタをすればそのまま魂があの世へ、なんて事になるかも知れない。不安は大きくなるばかりだ。(･･････あれ?)

そして、漸く幸子は気が付いた。幸子の魂がここに居るといふ事は、向こうの世界にある幸子の身体は現在、魂の抜けた状態という事だ。それはつまり･･････幸子の身体は死んでいるという事なのではないか？と。

「もう、戻れないのかな･･････」

弱気になつて両目に涙を溜めて俯く。「何とかなりますよ、きつと」という明石の慰めも気休め程度にもならない。プロデューサーにも会えず、深海棲艦とかいう化け物の居るこの世界で生きていくしかないのだろうか。そう思うと涙が込み上げてくる。正直･･････幸子はアイドルをしているお陰で自分の精神はもつと強いと思っていた。だがそれは勘違いだった。プロデューサーが傍に居てくれたから、これまで何とかやってこれただけだったのだ。プロデューサーの居ないこの世界で、果たして何処まで精神を保てるのか。今の幸子には自信が無い。

ポタリ、と涙が一滴浴槽に落ちた時。入渠施設の扉が開く。幸子がどうか気持ちを抑え涙を堪えて前を向くと、制服姿の不知火が立つて此方を睨んで(幸子がそう感じただけで実際は睨んではない)いた。

「弥生･･････いえ、輿水幸子。沖立司令が呼びです。入渠を終えたら医務室まで来なさい」

「わかりました」と小さく頷き、幸子は左手でゴシゴシと涙を拭い、不知火の後ろ姿を見送った。

6話 謁見

幸子は緊張の面持ちで通路を歩く。よくよく考えてみれば、相手はあの若さで海軍少将になる程の人物だ。相当なやり手、若しくは恐ろしい何かを持つ人物なのかも知れない。それならばこの泊地の提督があれだけおべっかを使っていたのも頷ける。

「はあ……憂鬱ですね」

向かうは医務室。今回は白露同伴ではなく、完全に幸子一人。『最前線で弾除けにでもなつてこい』なんて言われたらどうしようとか、どんな厳しい事を言われるのか、と内心ビクビクしながら歩く。

「それもこれも全部プロデューサーさんが悪いんですよ！プロデューサーさんが！折角カワイイボクが誘ってあげたつていうのに！」

……実は、幸子は今日の放課後にプロデューサーを食事に誘っていた。とはいっても雰囲気のあるレストランで、という程度のものだが。しかしながらというか当然というかプロデューサーには断られた。もしもプロデューサーが幸子の誘いに乗ってくれていたら不審者に刺される事も無かつたかも知れない……。

そんなもどかしい想いもあつて、プロデューサーに責任転化して気を紛らわす。

「プロデューサーさん……が……」

再び幸子の瞳からポタリと涙が溢れ落ち、そのまま泣き出しそうになつたがハッと我に返つて堪える。これから少将と面会しなくてはならないのだ。少将との話し合い次第で、今後の幸子が置かれる環境が決まる。幸子にとって決戦の舞台も同じだ。泣いている場合ではない。先程の明石の時のように実験動物のような扱いにされたら堪らない。何とかしてできうる範囲の最善の環境を勝ち取らなくては。

一度洗面所へと立ち寄り、顔を洗つて両頬をパンツと掌で叩いて自らを奮い立たせる。

「大丈夫、ボクに出来ない事なんてないんです」

敢えて鏡は見ずに、よしつ、とばかりに頷いた幸子は洗面所から出

た。フーツ、と大きく息を吐いて、医務室の扉に右手を掛けた。

「しつ、失礼します」

静かに扉を開くと、ベッドの脇に置かれた椅子に沖立少将は座っていて、穏やかな表情で此方を見ている。何というか、やはり不思議な魅力のある人物だ。人を惹き付ける何かを確かに持っている。しかしながら、一見優しそうに見えるその奥底に触れてはいけな狂気染みた何かを秘めているようにも見える。底の見えない人物。二の腕辺りから欠損している少将の左腕の事も気にはなるが、今はそれを出せる雰囲気ではない。

「待ってたわ幸子ちゃん。どうぞ座って」

「あ……はい」と気の抜けた返事をして、幸子は促されるままに用意された椅子に腰掛けた。改めて沖立少将と向き合うが、いざ話すとなると言葉が上手く出てこない。

初対面の相手や目上の人間相手にイチイチ気後れして話せないような性格だったら、幸子はアイドルになどなっていない。そのどんな状況でも臆する素振りを見せない幸子が、今回ばかりは緊張で上手く言葉を発する事が出来ない。

「あ、えっと」と言葉に詰まってしまった幸子を見かねてか、立ち上がって傍まで寄った少将は子供をあやすように目の前で屈むと「そんなに固くならないで。別に取って食おうって訳じゃないから」と微笑みかけてくる。

「ボツ……ボクは子供じゃないんですから!」

御子様のように扱われたのが恥ずかしかつた幸子の頬が少しばかり膨れた。確かに幸子はまだ14歳だが、子供扱いは心外だ。スタイルという点においては無論、沖立少将や白露とは比べるべくもなく歳相応（貧相ともいう）ではあるが。

「ごめんね、そんなつもりじゃ無かつたんだけど。それじゃ改めて。沖立夕星（せきは）です。呉鎮守府で提督をしているわ」

「……輿水幸子です」

右手を伸ばしてきた少将に、幸子も恐る恐る右手を差し出す。固く、という訳ではなくソフトに握手を交わして椅子に座り直した少将

の表情は、穏やかながらも先程より少しだけ真剣なものに変わっていた。

幸子に再び緊張が走る。忘れて……いたわけではないが、これから自身の処遇が決まるのだ。何とかして譲歩を引き出さねばならないのだ。

「幸子ちゃん、これからの事なんだけど」

来た。どうにかして明石の時のようなモルモット扱いだけは避けないと……と思っていた幸子だが、事態は思ってもいなかった方向へと転がった。

「幸子ちゃんはどうしたい?」

「……へっ?」

想定外だ。まさか丸投げしてくると思ってもいなかった。まあ正確に言えば丸投げという訳ではなく、幾つかの選択肢があったのだが。

一つはこのままショートランド泊地で『艦娘・弥生』として所属、活動する事。もう一つは元々軍属ではない幸子に配慮し日本の軍令部で大淀のような内勤になる事。最後の一つは別の鎮守府等への移動(艦娘・弥生として)。

「あの……ボクが選んで大丈夫なんですか?」

「ええ」

因みにだが、幸子に艦娘引退という選択肢は無い。最近では情勢が安定してきているとは言え、いつまた深海棲艦の大規模な襲撃があるかわからない。それに、艦娘の適合者自体がそうそう見つかるものではないからだ。余程の貢献があった、若しくは著しく衰えたでもない限り解体して一般人にはなれない。

さて、どうしたものか。白露達には優しくしてもらっているしこのままショートランドに残るのも悪くは無い……が卯月の件がある。かといって軍令部、というのはお堅い場所のようなのであまり行きたくはない。それに今更他の場所に行くのも……。他の鎮守府等の所属艦娘が白露達のように寛容とは限らない。

幸子はその場でしばし悩む。

「焦らないで少しの期間ゆっくり考えて。決まったら連絡してくれればいいから」

「分かりました。ボクも少し考えてみます」

この場では決められない。元の世界に戻るのがベスト、なのだがどう考えても直ぐには無理だ。より良い環境……となるとなかなか悩む。

「それじゃ、連絡待ってるわね」

「はい。ありがとうございます」

ペコリ、と頭を下げて医務室を出ようとした幸子だが、「あ、そうそう。言い忘れる所だったけど」と少将に呼び止められた。忘れる程度の事なのでさして重要な事でもないのだろうと思いつつ足を止めた幸子だが、少将が放った言葉は驚愕の物だった。

「明石さんは暫くショートランド泊地に滞在するから」

「……えっ」

明石が残るのは言うまでもなく、幸子の身体についてももう少し詳しく調べるのと元の世界に戻る方法の模索。それはつまり、幸子はもう暫くは明石のモルモットになるという意味だ。

「まっ、まっ、待つてくださいよ！そんな大切な事後から言わないでください！ボクは」

反論しようとした瞬間、背中から刺すような視線を感じて振り向く。案の定、視線の主は不知火だった。10 m程向こうに居た不知火がツカツカと此方に歩いてきて、固まっている幸子を改めて睨む。

「……司令に何か落ち度でも？」

「いえ、何でもありません。アハ、アハハハ……」

表情は固まったまま、幸子は渴いた笑いを浮かべ後退。相変わらず眼光鋭い不知火の事は苦手だ。

「失礼しました」と機械的に発し、幸子は回れ右して医務室から退散。背中側からぬいとかぽい等とよく分からない言葉で呼び合っているのが微かに聞こえはしたがここは気にしない方が身の為

だ。

食堂まで戻り、一番奥の席に崩れるように腰掛けた。落ち着いたら一気に力が抜けた。「はあく」と大きく息を吐き、テーブルの上に上半身を投げ出すように突っ伏した。

猶予も貰ったし、暫くの間は現状維持。明石の事を除けば想定していたような酷い扱いは無さそうだ。

ホツとして暫くそのまま力無くダレていた幸子の右肩がポンポン、と叩かれる。顔を少しだけ動かしその主の方へ視線を向ける。

「……白露さんですか」

「幸子ちゃん、どうだった？大丈夫だったでしょ？」

どうやら幸子の事を心配して来てくれたようだ。此方の世界ではプロデューサーは勿論、友達や仲間、頼りになるような人物も居ないので気にかけてくれているのは正直嬉しい……が、それを素直に表現出来ないのが幸子。跳ねるように上体を起こして立ち上り、両手を腰にあててふんぞり返ってみせる。先程までの態度とは大違いだ。

「とっ……当然ですよ！ボクにかかれればこのくらいヨユーですからね！」

その幸子を見て白露はクスクスと笑っている。幸子の虚勢はバレているらしい。頬を真っ赤にしつつ膨らませて睨むも、白露の方は動じていない。

「ほっ、本当ですからね！ボクの好きにしていって言うってもらったんですから」

「はいはい、そーだね幸子ちゃん。少将は優しかったでしょ？」

何故か少し自慢気にしながら、丁度良い高さにある幸子の頭を撫でてくる白露。幸子は頬を膨らませたままの不満顔ではあるがそれを拒否はしない。とはいっても公共の場で頭を撫でられ続けるのは恥ずかしい。それに、頭を撫でられるとプロデューサーの事を思い出ししてしまう。幸子を何時までも子供扱いして何かあると頭を撫でてくれるプロデューサー……。

「まっ、まあ優しかったのは事実ですけど。それじゃボクは少し部屋で休み……」

思考を誤魔化すように頭を3く4度横に振ったあと白露の手を静かに避ける。今日はあまりにも色々有り過ぎたし部屋へ戻って休もうとした幸子。しかしながらとある事に気付いた。そう……この世界での幸子の自室『弥生の部屋』の場所を聞いていなかったのだ。「白露さん、一つお願いしてもいいですか？」
「うん、いいよ」

……そうして案内された『弥生の部屋』。濃い紫に三日月の模様の入った、所々にピンク色の花の模様のある壁紙。薄いピンクの春色の床。これまた三日月の模様の入ったブラインド付きの円形窓。小物類が置かれた、小さめの白い机。弥生の部屋は軍人とはとても思えないような部屋だった。

「ここが弥生さんの部屋、ですか」
「そうだよ。カワイイ部屋だよね」

白露の部屋も確かに整理されてはいたが、機能性重視のいかにも寮、といった部屋だった。だが弥生という艦娘はどうやら自室に拘りがあつたらしい。

他人の部屋を勝手に使う（確かに身体は弥生のモノだが）というのは些か抵抗があるが、今は仕方無い。

「ねえ幸子ちゃん。今日は色々あつて精神的に疲れてるでしょ？少し休んだ方がいいよ」

「大丈夫ですよ。ボクはこれでもアイドルなんですよ？この位じゃ疲れたりしませんよ」

強がってみるものの、また白露に抱き上げられて強制的にベッドへ寝かされた。明石なら兎も角白露相手では抵抗は無理だろう。「はあ」と溜め息をついて諦めて瞼を閉じた。

「分かりました。それじゃ少しだけ休みますから。おやすみなさい、白露さん」

「うん、おやすみ幸子ちゃん。夕飯前に起こしてあげるからね」

瞼を閉じてみたら急激に意識が遠退いていく。やはり精神的にかなり参っていたようだ。このまま眠って起きたら全て夢でした、で元に戻っていたらいいのに。そう思いながら幸子は夢の中に落ちて

いった。

明石が部屋へと訪ねて来たのは幸子が眠ったあと。幸子を無理に起こすのは流石に憚られたのか、明石もこの場は白露と共に一時的に退散。司令室へと向かい歩く。

「幸子ちゃん……戻れるといいね」

「それですけどね。幸子さんの場合だと相当難儀だと思えますよ」

幸子本人が身体ごとこの世界に転移してきた、というのならどうかその方法を探して元の世界に送り返せばいい。しかし幸子の場合、魂のみの転移、しかもその魂も弥生に入っている。弥生から魂を分離し同時に幸子を元の世界に返す……そんな事が果たして可能なのか。それに、向こうの世界の幸子の身体が死んでいる可能性を考える……。

「幸子さんの場合……この世界で『弥生さん』として生きていく方が幸せかも知れませんか」

7話 出会い

翌日の、幸子の目覚めは爽快であった。体調にも異常無し。前の日寝たのが早かったせいもあり、総員起しの一時間前にスッキリと起きる事が出来た。といっても総員起しをまだ体験していない、説明も受けていない幸子にはそれが一時間後にある事すら気付いていないが。「……………はあ」

しかしながら。身体のもそれとは裏腹に気持ちちは沈む。

ベッドに座ったまま部屋の中をぐるりと見渡して、盛大に溜め息をつく。疲れ切って目を閉じる前の、昨日の景色と全く変わらない部屋。この世界は実は幸子が見ていた夢でした、で起きたら全て元に戻っていて欲しかったが、やはり現実是非情だった。

元の世界に暫く帰れないのは覚悟するしかない。問題はどうかやって帰るか、だ。あの明石とかいう人物は腕に自信はありそうだが信用は出来ない。かといって幸子だけでは帰る方法など皆目見当もつかない。

「はあ…………プロデューサーさん……………」

もう一度盛大に溜め息をついて、幸子は仕方無くベッドから降りる。

「取りあえず顔を洗って、歯でも磨いてから……………?」

ふと気が付いたのは、自分の格好。上はTシャツ1枚、下は下着のみ。少なくとも寝る前に着替えたような記憶は無い。しかしながら、不安を感じたのはほんの一瞬。テーブルの上に畳まれ置かれた『弥生』の制服があり、その側に『寝苦しいだろうから脱がせておいたよ』という白露からの書き置きがあったからだ。

(白露さんですか。なら問題ありませんね)と安心するのと同時に、危うくこんなあられもない格好で出歩く所だった自分を反省。

(幾ら元の世界と違うって言っても、アイドルのボクがこんな隙を見せるなんて…………いやでもこの格好で迫れば流石にプロデューサーさんでも…………)

そんな事を考えながら、クローゼットの方へと足を向けた。開いてみるとやはり畳まれていた弥生の制服と同じものが何セットもある。一番左にあったものに手を伸ばし、着替える。ここは海軍だし、他の艦娘達は種類は違えど皆制服を着ていた。きっとここでは制服での行動が義務なのだろう。

着替え終わり、髪を梳かす。当たり前だが鏡に映るのは幸子の顔ではなく、艦娘弥生の顔だ。

「ボクのカワイイ顔が……」と本日3回目の溜め息。意識は自分のものなのに顔は他人のもの、というのはどうにもシツクリ来ないが、今は仕方無い。

一度部屋から出て、見つけた新品であろう歯ブラシを片手に近くにあった洗面台へ。幾らこの身体が弥生の物であったとしても、幸子以外の人間が使用した歯ブラシを使うというのは抵抗がある。

磨き終え、再び部屋へ。

三日月型のヘアピンを自身の髪の『右側』に着けた所で、丁度ノック音。「幸子ちゃん、起きてる?」という声が聞こえた。どうやら相手は衣笠のようだ。

「はい、起きてますよ」

ガチャリ、と鍵を外し扉を開ける。扉の外に立っていた既に制服姿の衣笠の表情が一瞬だけ曇った。『弥生』は三日月型のヘアピンを髪に左側に付けるのが習慣だったからだ。しかしながら、幸子は衣笠の一瞬の変化には気付かない。

「こんな朝早くから何の用ですか?」

「幸子ちゃんには今日から少しずつ訓練に参加してもらおうと思っ
ね」

明石や白露はまだそうは思っていないが。少なくとも衣笠とこの泊地の提督は幸子はもう元の世界には戻れないと思っっている。だから、『艦娘弥生として深海棲艦と戦うため』に幸子を訓練する必要があると考えているのだ。

そんな意図を汲み取れない幸子からすれば、衣笠の言葉には恐怖もあり同時に興味もある。番組で水上スキーに挑戦させられたりした

事もあるがそれとはまるで違う、あの海を自分の意思で自由に走り回れる艦娘の海上移動は幸子の目にも魅力的に映る。イルカやカモメと並走しながら優雅に走れたらさぞ気持ちが良い事だろう、と。

「わかりました。任せてください、ボクにかかればヨユーですよ」

フフンツ、と何時ものように胸を張ってドヤ顔を見せる幸子。衣笠はその様子に一抔の不安を覚えつつ「あははは」と苦笑い。

「そんな簡単じゃないんだけど……まあやってみれば分かるよ、幸子ちゃん」

用意が出来たら艦娘寮の入口で待っているように衣笠に伝えられた幸子は、一先ず朝食をとろうと部屋を出た。テクテクと歩いて向かうは白露の部屋。先程衣笠に総員起しの件も聞いたので、白露は恐らくこの時間なら起きているだろう。

2階にある幸子（弥生）の部屋の一階上、つまりは3階にある白露の部屋の前。コンコン、と扉をノックしてみるも返事はない。

まだ寝ているのかと思ってもう一度ノック。しかしやはり返事は返ってこない。総員起しの時間までもうすぐ。「白露さん、白露さん」と声をかけてみるが、応答無し。諦めて一人で朝食をとろうと階段の方へと向かった幸子だが、背中側から「幸子さん」と声を掛けられた。思わずビクツと身体を震わせ、同時に「うげっ」とアイドルらしからぬ声を洩らす。

「いやー、偶然ですね！おはようございます、幸子さん」

観念して幸子はその声に振り向くと、居たのはやはり明石。どうやらこの階に泊まっていたようだ。どうにか営業スマイルは間に合ったものの、心の中の表情は引き攣ったままだ。

「おっ、おはようございます明石さん」

「おー、流石アイドル、良い笑顔ですね！」

明石の事は苦手だ。言うまでもなく初日のアレが原因。危うくトラウマになる所だった。それに、明石は少し危険な香りがする。マツドサイエンティスト的な危うさだ。

「これから朝食ですか？よかつたら御一緒にしませんか？」

満面の笑みでそう問い掛ける明石に躊躇はしつつも幸子は頷く。この右も左も分らない異世界で独りで朝食というのは非常に心細い。だからこそ白露を誘おうと思ったのだが居ないものはどうしようもない。

それに、なんだかんだ言った所で元の世界に戻る為にも明石とは付き合っていかなければならないのだ。『地雷』を回避しつつ明石と仲良くなればそれに越した事はない。

「そうそう幸子さん。白露さんならもう出てますよ？午前に呉艦隊との演習がありますから」

「うっ……。べっ、別にボクは白露さんが居なくても大丈夫ですよ」白露はここショートランド泊地の第1艦隊所属で演習の準備中だから居ない。強がりを言っつてはみるが、それも明石には大して効果は無いようだ。幸子も朝食の誘いを断らなかつたのだから無理もないが。

「まあまあ、たまには白露さんが居なくてもいいじゃないですか。幸子さんとは色々話さなきゃいけないですし」

どうにも不安しか無いが、幸子は明石と共に食堂へと向かう。その道中でたまにすれ違ふ艦娘達の視線が痛い。彼女達は恐らくは自分の事を提督なり衣笠なりから聞いているのだろう。アイドルであるし注目を浴びる事には慣れているが、こういう奇異の目は勘弁してほしい。

朝食を受け取り、最奥の隅のテーブルになるべく目立たないようにひっそりと座ったつもりの幸子。まだ動き始めていない艦娘も多いのか、食堂の人はまばら。それでも件の幸子と普段はこの泊地には居ない明石、という組み合わせの為に周りからは浮いていて目立ってしまう。

「早速ですけど幸子さん。戻る方法なんですけど、最初は定石から試してみましようか」

「定石ですか？」

そう言われてもピンと来ない。異世界から元の世界に戻る為の定石などあるのか……と暫し考えて、幸子は気付いた。こういう事に

先ず試す事といえは……そうだった時の再現だ。

「そうですよ。じゃあ幸子さん、先ずは瀕死になってみましょう！こ
う、ナイフでグサリ、と」

「ひいひいひいひい!?!」

悲鳴をあげて椅子から立ち上り、幸子はそのまま後退り。あんな恐
怖と痛みは二度と御免だ。

「むっ、むっ、無理ですっ！幾らボクでも絶対無理ですっ!!」

恐怖に表情を引き攣らせ涙目で訴える幸子にも、明石は顔色一つ変
えない。それどころか「大丈夫ですっ、仮に失敗しても死ぬ前に入
渠すれば回復しますから」と更に押してくる。

「嫌ですっ！絶対嫌ですっ！ボクを何だと思ってるんですかっ!」

壁際に張り付いて首をブンブンと横に振る。迫ってくる薄ら笑い
の明石を見てもう駄目だ、と思ったその時。明石を遮るように幸子の
前に立った一人の少女が居た。彼女は明石が怖いのか身体を震わせ
ながら、か細い声で明石に向かって訴え掛けた。

「いっ……幾ら明石さんでも弱いもの苛めは駄目なのです……」

茶色い長髪の右側をアップヘアにして束ね左側をおろしていて、
白が基調の正統派のセーラー服を身に付けた恐らく小学生程の年齢
の少女。上着の右側の裾に皿というバッジを付けているのが幸子か
らも見える。海軍の基地であるここに居るといふ事は、彼女もまた艦
娘なのだろう。というか、こんな恐がりの少女が軍で働いて大丈夫な
のだろうか？

「あっ……あははははっ。嫌ですな電さん、冗談、冗談、ですよ!」

とてもではないが先程の明石の目は冗談には見えなかった。あれ
は完全に実行するであろう目だった。

それはそれで取りあえず置いておくとして、しかしどういふわけで
明石はこの目の前の如何にも弱そうな少女の訴えに明らかに動揺し
ているのか。明石がそこまで強くないとは言っても、今の幸子を無理
矢理振じ伏せるくらいには力はある筈。という事は目の前の少女が
明石よりも強いという事か。白露や卯月がそうであるように、この
『電』と呼ばれた少女もそれなりに練度のある艦娘という事か。

「あつ……そつ、そうでした！私はこれからやる事があつたんでした！それじゃ幸子さん、電さん、また後で！」

明石はジリジリと後退し二人から遠ざかっていく。その去り際に「本当に冗談ですから！電さん、どうか山本大将には内密に！」と言い残して食堂から退出して行つた。

暫しポカン、とその場で呆氣に取られていた幸子。目の前の少女に「あの……大丈夫……なのですか？」と声を掛けられ我に返る。

「あつ、えつと……助かりました」

ホツと一息ついた幸子とは違い、笑顔を向けながらも「私の力じゃないのです」と何処か悲しそうな目の前の少女。互いの自己紹介がまだだった事に気付いた二人は、テーブルに座り直して改めて向き合つた。

この少女、やはり艦娘。暁型駆逐艦四番艦、電。艦娘になつてそこまで時間が経っていないらしく、練度はかなり低いようだ。今回は経験を積むという意味もあつて沖立少将に連れて来られた呉所属の艦娘らしい。呉の艦隊が到着した時は見えなかつたので恐らく沖立少将が乗っていた駆逐艦に同乗していたのだろう。

引つ込み思案で自分に自信無さげという、幸子とはまるで反対の少女。その言動や仕草から、彼女が優しい心の持ち主だという事はわかる。電となら初心者同士上手くやれそうだ。

「ボクは輿水幸子です。電さん、これからよろしくお願いします」
「……えつ？弥生ちゃんじゃないのですか？」

電は悪い事は考えなさそうだし言つても大丈夫だろうと思つて打ち明ける。

当然ながら驚いた様子の電。どうやら艦娘同士だと相手の艦艇が誰であるかある程度分かるようだ。電としてはどう見ても弥生だと思つていた相手が違うというのだからその反応は分からないでもない。

二人は朝食を食べ終える少しの間、互いの事を話した。幸子は元々この世界の人間ではない事や、元の世界ではアイドルをしている事。電のほうは自身の近況や両親の事について。

「へえ……お父さんがお偉いさんなんですか。凄いですね」

「そんな事ないので。電は電、お父さんはお父さんなのです。それよりアイドルをしてる幸子ちゃんの方が凄いです」

聞けば電の父親は横須賀鎮守府の提督、階級は大将らしい。成る程、本来横須賀鎮守府所属の明石が先程焦っていた理由が分かった。「あつ……。そろそろ時間ですね」

少しばかり話し込んでしまった。衣笠との約束をすっかり忘れていたのを思いだした幸子は、電に「それじゃまた」と別れを告げて寮の入口へと急ぐ。

……が。いざ寮の入口に着いてみると何故か電がそこに居た。

「あれ？電さん？」

「幸子ちゃんも一緒なのです？」

少しの間だが、こうして幸子は電と行動を共にする事になる。

8話 慢心

爽快。今の幸子の心境はこうだった。

水面を自分の意志で、海風をうけながら自在に走れるのは実に快感だ。

港の傍の海上に幸子は居た。勿論、駆逐艦弥生の艤装を身に付けて海の上に立っている状態で。艦娘は艦艇の魂に刻まれた艦としての力を持っているので、大抵の者は海に浮く事も含めて基本的な事は初めからある程度こなせる。今の幸子もそうだ。前進、旋回、加速、どの動きをするにしても何となく感覚で動ける。

幸子の場合はいドルとしての日々のレッスン、テレビのロケで挑戦させられた数々のアトラクションで鍛えられたバランス感覚等々も加味されるが。

「おー、幸子ちゃんもなかなかやるね」

弥生になつたばかりながらそこそこ動いている幸子の様子に、衣笠も感心しているようだ。「当たり前じゃないですか、ボクにかかればこのくらい何て事ありませんよ」と腰に両手を当ててふんぞり返りそれに答えた幸子だが、それを見て笑顔を作っている電の表情に陰りがある事に気付く。

「電さん、どうしました?」

「あの、その……幸子ちゃんは凄いです……」

電の方はといえば、決してそうではなかったのだ。幸子達『大抵の者』の方には含まれなかった電は、最初の頃は海上に立つのが精一杯。前進しているというよりは推進機関に振り回されていると言った方が正しいような状態だった。バランスを崩してすぐに倒れるなんて事は屢屢。その様子はアイススケート初心者が上手く滑れずに転倒を繰り返す様子を思い浮かべてくれれば分かりやすいだろう。

そうやって最近やっとともに走れるようになった電にしてみれば、今日初めて海上に出たばかりの筈の幸子の姿を見て羨ましいと思うと同時に自分の情けなさを再確認する事になったのだ。

「まっ、まあボクは特別ですからね。比べても仕方ありませんよ。電

さんだつて上手く滑れているんですし問題無いじゃないですか」

電の事を気にして口を開いた筈の幸子だが、自尊心が余計な仕事をしてしまいフォローはしきれていない。「そう……ですわね」と笑顔ではあるものの、やはり電の表情は優れないまま。

「二人とも航行は問題無さそうだね。それじゃ、ちよつと砲撃してみよつか？」

そんな二人を見かねて、衣笠が話題を変える。今日は元々幸子の航行訓練と砲撃訓練の予定だったし、訓練時間が繰り上がったただけだ。衣笠としても幸子の腕を早く確認しておく必要はあったので問題は無い。寧ろ幸子が入並みに航行できそうな事に安堵しているくらいだ。因みに電の砲撃の腕は……沖立少将から聞いているので衣笠は知ってはいる。

そうして幸子は言われるままに訓練に持たされた12.7cm連装砲A型を構えた。最大仰角40度、水平射撃時には初速910m/秒、10発/分。帝国海軍の誇った小口径砲である。今回の目標は100メートル先に浮いている的の付いたブイ。これでも砲撃初心者である幸子の為の距離である。

人間が持ち運びできる、ランドセルより少し小さい程度の大きさのこの小口径砲、実はどんな力自慢でも普通の人間では持ち上げる事すら出来ない。それを重さなど微塵も感じず幸子が軽々と扱えるのは、現在の幸子の身体に宿る『艦艇・駆逐艦弥生の魂』の成せる技だ。

そんな事を知っている筈もない幸子は、適当に目標のブイを睨む。本来であれば風の強さ向き、湿度、地球の自転云々……と様々な計算を考慮して撃たねばならないものなのだが、その辺は妖精がやってくれているらしい。現に幸子の『艦装』にも、専門の妖精達が乗り込んでいる。言わば彼らは駆逐艦弥生の乗組員であり、その司令塔である艦長が幸子という事だ。……何とも頼りない艦長ではあるが。

「目標、方位マルーサンーマル……って何ですか？よく分かりませんけどいきますよ……っていつ！」

先ずは一発。続いて二発目。通常ならば、身体は艦娘とも言えども素人である幸子が当てられる筈はない。目標を散布界に収めるのすら

難しい筈の初砲撃。ところが幸子の放った砲弾は、一発目がブイのすぐ上を掠め越えた後方の至近弾。そして二発目は的に、とはいかなかったがブイの根元に直撃。

それを見た電の表情に一層陰りが見えるが「……えっ？」と目を丸くして驚く衣笠の身体に遮られて幸子の視界からは見えない。

命中した事に自分でも驚きポカン、と停止していた幸子が状況を飲み込んで再起動したのは、1分程後。

「ふっ……フッフッフッフ……。ボクの実力を見ましたか衣笠さん！」

「幸子ちゃんって初心者だよな？ 凄いなえ」

衣笠の言葉に気を良くしたのか、幸子は連装砲に付いているベルトを首に掛けて両手を腰に当てフフンツ、と得意気にふんぞり返ってみせる。これがまぐれ当たりかも知れない事など頭の片隅にすら無い。其れ処か『自分は特別なんだ』とすら考え始めていた。

電も最初は苦労したという海上移動も難なくこなし、距離が近いとは言え砲撃の腕もある。だから自分もしかすると艦娘として特別な才能があるのではないか、異世界ものの話でよくあるような所謂『チート』能力持ちなのではないか、と実に都合のいいように考えてしまっていた。

試しに、と幸子は更に二発砲撃。一発はブイを散布界内に収め、もう一発はすぐ右に着弾。これは幸子の中で確信を持つに十分な結果だった。

「フッフッフッフ……どうですか！ 流石ボクですね！ 見ましたか！ ボクはカワイイだけじゃないんですよ！」

すっかりいい気になってしまった幸子。それを見て（初心者にしては）良い腕かな、と微笑む衣笠。電も笑ってくれてはいる。ただ電の瞳の奥は非常に暗いが。

早く元の世界に戻るならそれに越したことはないが、もう少しこの世界に留まるのも悪くないかも知れない。これならばコチラでもやっていけそうだ。この艦娘としてのチート能力をコチラの世界で発揮するのもいいかも知れない。幸子はすっかりその気になってし

まっていた。電の心境などもはや二の次だ。

……しかしながらと言うべきか当然と言うべきか。この砲撃は四発とも完全なるまぐれ当たりだった。そしてこの油断と慢心によって、幸子は特大の貧乏クジを引く事になる。



左脇腹にジンジンとした痛みを感じて、少女は目を覚ました。横になっただま頭だけ動かして周りを確認する。

清潔な、オフホワイト色のベッドの上。部屋の中も同色で統一されている。ベッドの脇に小さな収納棚があり、自身の頭の上辺りにボタン……ナースコールがある。恐らくは病院だろう。

ハッと我に返った少女は右手を伸ばし、確認するように左肩をまきぐり、そのまま左掌、指先まで触ったあと毛布から左腕を出して「よかった、ちゃんとある」とホッと息をついた。

しかし同時に何故、という疑問が浮かぶ。左腕が治っているのに、どうして左脇腹の傷はそのままなのか。

包帯が巻かれ固定された左脇腹を微かに恨めしそうに見つめる。

もしかしたら、そういう事なのかも知れない。失敗したから、足を引っ張ってしまったから自分はもう用済みなのかも知れない。だから、腕だけは治してもらえたが脇腹はそのままなのか。もう第一線からは引退させられたのか。それなら此処はきつと、内陸の病院だろう。成る程、見たことの無い部屋なのが納得できた。

……と。少女の耳に、扉が開く音が聞こえた。視界に映った少女が良く知る男性は、少女が起きた事が嬉しかったと見えてホッとした表情を浮かべ少女のベッドに近付いてきて、備え付けの丸椅子に座った。

「目を覚ましたか。良かった良かった。一時はどうなるかと思っただぞ」

少女が「すみ……ません。私が……油断したせいで」と少しばかりぎこちなく謝ると、しかし男性は驚いた表情に変わった。

「お前……喋り方まで変える程凹んでるのか。心配するな。犯人は無事逮捕されたし、怪我が治ったらまた一緒に頑張ろうな」

「……え？」と思わず声を洩らした少女。確かに瀕死の怪我を負ったのは事実だが、誰かに襲われたとかでは無いのは目の前の男性も知っている筈だ。にも関わらず『犯人』等と口走ったのは一体どういう事なのか。それに、少女は喋り方を変えた覚えはない。この違和感は一途なんなのか。

「どうした幸子？」

男性に『幸子』と呼ばれて、少女は戸惑った。この男性は今、確かに自分の事を『幸子』と呼んだ。理解など出来る筈もなかった。「私……『サチコ』じゃないです」と僅かに分かる程度にムツとした表情に変わる。

一体どういふつもりなのかは分からないが、自分がこんな時にそんなジョークを言われるのは、正直少しばかりカンに触る。

「……司令官、そういう冗談……私、好きじゃないです」

少女のその言葉を聞いて、今度は男性が驚いた表情。どうやら少女が男性の事を『司令官』と呼んだのが原因のようだ。

「幸子？俺の事『司令官』って何言ってるんだ？お前、本当に大丈夫なのか？」

「だから、幸子じゃないです……『弥生』、ですよ？」

少女……弥生は今度は先程より一層（と言っても少しだが）ムツと表情を顰める。幾ら司令官でも時と場合でやっていい事と悪い事があるというものだ。頑として自分の事を『幸子』と呼ぶという事はこの状況事態が弥生を騙すドツキリか何かという事かも知れない。だとしたら卯月が一枚噛んでいる可能性もあるが……卯月は人の心を傷つけるような悪戯はしなかった筈だが……。

「どうして、こんな事するんですか？私……」

弥生はベッドから降りようと身体を起こした。脇腹の傷は痛むものの、そんな物は入渠すれば回復するので問題にならない。痛みを堪え震える足で立ち上ったものの、身体を支えきれずにフラついてそのままベッドに腰掛ける。

「幸子、まだ無理したら駄目だ」

慌てて弥生を支えようとした司令官の手を振り払い、弥生は視線を

逸らせた。こんな状況でもまだ自分を『幸子』と呼ぶ司令官に、流石に怒りを隠せなくなってきた。

……と、視線の端にあるもの……鏡に強烈な違和感を感じた。その鏡に映るものがおかしいのだ。鏡に視線を向けた弥生は、何が起きたか理解出来ずしばし思考停止。何せ鏡に映っていたのは弥生ではない別人の少女の姿だったのだ。

我に返って、脇腹の痛みも忘れ慌てて窓を開けてみると、明らかにそこは弥生の居たシヨートランドではない。間違いなく日本の風景だった。驚き司令官に「ここは、何処ですか？」と訊ねると、返ってきた答えは「●●区の病院だ」だった。

「どうして……日本に？」

そう口にした弥生の様子にいいよ焦ったらしい司令官は「……ちよつと先生呼んでくるからな、そこで大人しく待つてるんだぞ？」と一言弥生に告げて病室を出ていった。

シヨートランドから態々日本に連れてくる、など驚かせるにしては少しばかりスケールが大きい事に戸惑ってベッドに座ったままの弥生。

コンコン、と扉を叩く音が聞こえて、弥生は「どうぞ」と力無く返事をした。入ってきたのは銀髪の美少女。なんとというか、人を惹き付ける魅力を持った女性だった。例えるならばそう……かぐや姫のよう。

全く容姿や雰囲気は違うが、弥生は彼女をまるであの英雄と呼ばれた化け物駆逐艦夕立のようだ、と思った。

「おや、起きたのですか輿水幸子」

……まただ。彼女もまた、弥生の事を幸子と呼んだ。これはもしかしたら先程鏡に映った姿と関係があるのかと思った次の瞬間。銀髪の彼女の視線が鋭くなるのを感じた。

「はて……輿水幸子、少しばかり質問をしても宜しいでしょうか？」

「……はい」

弥生は魅入られたように動けずにそう頷く。それを確認した銀髪の彼女の口から出たのは。

「貴女は何者ですか？どうして輿水幸子の身体の中に居るのですか？その身体の本来の持ち主……輿水幸子の精神を何処にやったのですか？」

9話 練習航海

幸子、電共に航行に問題無さそうなのを見て衣笠が提案したのは「んー、それじゃちよつと練習航海に出てみよつか」というものだった。

数ある任務の中でも基礎中の基礎。新米の艦娘が遠征任務を受ける前に慣れる為に泊地近海を航行するだけ、の謂わば遠征航海の為に練習に当たるものだ。

幸子も電も今後はもちろん深海棲艦討伐に参加する事もあるだろうが、遠征だつて立派な任務。普段主力の艦娘達が出撃できるのは遠征担当の艦娘達が鋼材や弾薬、石油やボーキサイトといった重要な資材を集めてくるお陰だ。

勿論資材は日本本土から定期的に送られてくるのだが、それだけでは艦隊の維持には全く足りない（中には『資材？大規模作戦でも備蓄無し』の0からスタートでも何とかできるけど?』という提督も居たりするが、普通は到底そんな真似出来るものではない）。

「練習航海って何をするんですか?」

とは言っても。この世界の、とりわけ艦娘の事に関して殆んど知らない幸子にも不安がない訳ではない。しかしながら衣笠の「泊地近海をぐるっと回るだけだから、そんなに危ない事はしないよ?」という言葉聞いてホッと胸を撫で下ろした。

「本当に練習なんですね、安心しましたよ。それならボクでも大丈夫そうですね」

「たまりに深海棲艦とエンカウントする事もあるんだけどね」

衣笠の言葉通り、近海といえど海は海。深海棲艦が現れる場合もある。ことショートランド泊地近海には強力な深海棲艦も居る。であるから勿論幸子と電の二人だけで練習航海に行かせるような真似はしない。万が一に備えて今回で言えば衣笠と一緒に着いていくわけである。

電は兎も角、幸子は衣笠の言葉を信じ安心しきっていた。幸子にしてみれば、ここショートランド泊地はRPGで言うところの『始まり

の街』であり、RPGは最初は難易度の低い所からスタートと相場が決まっている。だから出てても精々スライムみたいな雑魚敵のようなものだけだろう、と高を括っていた。それにたとえそれなりの相手が出てもチート持ちであろう自分の敵ではない、と。

反対に電は「あの……衣笠さん、本当に大丈夫なのですか？」と不安を隠しきれない様子。それはそうだろう。電はショートランド泊地近海に例の深海棲艦が時々現れる事を聞いて知っているのだから。

「大丈夫よ。泊地からの応援もこの位置なら間に合うし、いざとなったら衣笠さんが守ってあげるからねっ」

右目をウインクして答える衣笠を見ても、電が安堵する様子は無い。

「大丈夫ですよ電さん。ボクも付いてますからね」

幸子が電の両肩を正面からポンッと叩く。少しだけビクツと震えた浮かない表情の電に、幸子は自信たっぷりの笑顔を向けた。

「電さん、何かあってもボクに任せてください！」

暫しポカンとしていた電がクスツと笑い「はい。お願いするので」と漸くその気を見せた。「よし、それじゃ行こっか」と言って零式水上偵察機を発艦、羅針盤片手にゆっくり前進し始めた衣笠の後ろを、少し距離を置いて並走する二人。

三人はショートランド諸島を南下。チョイスル島の南東近海を航行中の事。

泊地の極近海上を走っていた時とはまた違う海上の航行。島から近いとはいえど、辺りは一面海。微かにチョイスル島の影が望める程度だ。この風を受けながらの航海、しかも乗り物に乗っている訳ではなく自身の自由意志のままに走れる爽快感。幸子もこの事ばかりはこの世界に來れた事に感謝した。この感動はきつと、元の世界に居たら永遠に味わう事が出来ないに違いない。たとえ実現したとしてもそれは一体どのくらい先の未来になるか分からない。

「あは、あはははっ！凄いですね！」

これが練習航海、という事もすっかり忘れ興奮の収まらない幸子

は、あちこち見回しながら満面の笑みを見せていた。衣笠の後ろを真つ直ぐ着いていく電と違い、景色を良く観る為にフラフラと蛇行しながら。

『幸子ちゃん、気持ちは分かるけどこれも訓練だからね?』という衣笠の通信にも「分かってますよ!」と応えつつも止めようという様子は微塵もない。

……と。そんな時だった。衣笠からの通信。『二人共、第二戦速を維持して!』とその声には張りつめた緊張感が滲み出ている。

「衣笠さん、どうしたんですか?」と幸子は呑気に聞き返し事態を飲み込めていない。

『偵察機が撃墜されたわ!二人共、絶対私の前に出ちゃ駄目だからね』衣笠の様子からして、どうやら敵艦隊が現れたらしい。衣笠の偵察機は発見され撃墜されたようだが、三人が向こうに見つかったかは分からない。今ならまだ上手くいけば見付からずにやり過ぎす事が出来るかも知れない。

……のだが。今の幸子がそんな事を考える訳はない。「敵ですか!フツフツ、いよいよボクの出番ですね!」と無駄なヤル気を出していた。

連装砲を持った右手にも力が入る。

『敵の艦爆隊を確認!駄目ね、コツチも見つかってる!二人共、対空戦闘用意!』

タイクウセントウ……?と暫し悩んだ幸子。そう。実はまだ教わっていないかったのだ。幸子の隣で恐怖でガタガタと震え表情を引き攣らせ機銃を構えていた電が、「うーん」と悩む幸子に気付いた。

「幸子ちゃん、機銃なのです!これ!これなのです!」

電は自分の構えた機銃を見せてアピールしている。幸子の持っている連装砲A型改二は対空には向かない。別に持たされた機銃で対処する他は無い。幸子達に空母が同行していれば話はまた違ってくるのだろうか、今は自分達で対処するしかない。

本来ならばこの訓練用の航路に深海棲艦が現れるのは非常に稀。その稀を引く辺り、やはり幸子は色々な意味で『持っている』と言え

る。

『ちよつと待つてよ……あれつて飛び魚艦爆じゃ……』という衣笠の通信の直後。『ドゴオン』という何かの爆発音と『キヤアア』という悲鳴が聞こえてきた。衣笠に何かがあったに間違いない。助けに行こうと慌てて走り出そうとした幸子の左手首が「駄目なのです」と電に掴まれた。

「電さん、どうして止めるんですか！衣笠さんを助けに行かないと！」
「……駄目なのです」

そう呟いた電の視線の先を追つて見ると、海面に何やら線のような跡が走っているのが見えた。もしもさつき幸子が飛び出していたら、ちよつどその線と幸子の航跡がぶつかる位置に走っている。

「電さん、あの飛行機雲みたいな海を走る跡は何ですか？」

気になって電に聞いてみるも、返事が返つてこない。おかしいと思つて電の顔に視線を戻してみると、電の表情は絶望に染まりポロポロと涙を流していた。

「えっ……電さん？」

「もう……もう駄目なのです……お父さん、お母さん……助けて」



独房の簡素なベッドにゴロン、と力無く横たわり「はあ」と小さく溜息。

こうして独りゆつくりと考える時間があれば、自身の行動を冷静に捉える事もできるようになる。

「……流石にアレは無いっぴょん」

そう卯月はひとりごちる。気が動転していたのは分かる。弥生の事を案じたのも分かる。だからといって、弥生の身体に宿る得体の知れない他人を追い出す為に弥生の身体の首を絞めよう、など以ての外だ。たとえそれで幸子の魂を追い出したとしても、肝心の弥生の身体が死んでしまつては元も子もない。

幸子とかいう魂は是が非でも追い出さねばならないが、それによつて弥生の身体が傷付く事があつてはならない。そんな分かりきつた事すら理解出来ないほど混乱していた自分に腹が立つ。理由はどうあれ、もう少しで親友の身体を殺す所だったのだ。

日頃の悪戯で怒られる程度では反省の色すら見せない卯月だが、今回ばかりは反省と後悔しかない。

「はあ」

今度は大きく溜息。あの不審な魂を追い出す方法を一刻も早く見つけ出すと同時に、その間弥生の身体は死ぬ気で守らねばならない。

「両方やらなくちゃいけない、つてのがうーちゃんの辛い所っぴょん」昔に同じ駆逐艦の秋雲が使っていた言い回しを真似てそう呟いて、再度溜息。

と。コンコン、と厚い扉を叩く音と「卯月ちゃん？」という聞き慣れた声が聞こえた。

「白露……何か用っぴょん？」とベッドの上で動かずに力無く返事をした卯月に「あのね」といつもと違いトーンの低い白露の音が響く。

「あのね卯月ちゃん。幸子ちゃん、悪い子じゃなくてね、それでね」

「はあ……」とまた溜息をついた卯月は「もうあんな真似は……『弥生の身体』を傷付ける事はしないっぴょん」とだけ答えて黙った。

以降あれこれとどうにか気を紛らわせようと白露が話しかけるも、卯月は何も応えない。白露も諦めて扉から離れていく。その足音がトボトボと落ち込んでいくように聞こえた。

「……心配してくれてありがとうっぴょん」

足音が聞こえなくなつた後に、卯月はそう呟いた。もう少し時間が欲しい。あの弥生の身体に居る不審な魂の主を見ても落ち着いていられるだけの時間が。そういう意味ではこの独房でのひとときは丁度いいのかも知れない。少し眠つて気持ちと記憶の整理でもした方がいいだろう、とそのまま瞳を閉じた卯月だが、今度は扉の向こうからドタドタと誰かが走ってくる音。

当然ながら卯月の独房の扉の前で止まった。そのすぐ後に、ドンドンドンドン、と扉を叩く音と白露の怒鳴り声。

「卯月ちゃん！大変なんだよ卯月ちゃん！」

「……五月蠅いっぴよん。うーちゃんは寝る所っぴよん」

両手の小指で両耳を塞いで寝ようとした卯月の耳に微かに白露の何かを伝える声が聞こえて、ガバツと慌てて上体を起こした。

「今何て言ったっぴよん？」

「大変なんだよ！幸子ちゃんがつ！」

10話 世の中そんなに甘くない

「つと、あつぶなかつたあ」

穏やかな海面を右舷方向に走りながら、衣笠は後悔していた。レ級の魚雷を食らったがどうにか中破で耐えてみせた。着ている服もロボロだし身体のおちこちに傷があるものの、重傷で今すぐにどうこうしなくてはならないようなものは無い。

とは言っても主機にダメージを受けたらしくノイズが混じる状態。その上速度も大幅に低下。恐らく出せても20ノット程度が限度だろう。状況は芳しくない。

レ級の艦爆隊の第一波はどうか耐える事が出来た。これも提督から預かっているイタリア製の90mm単装高角砲、ドイツ製のF u M O 25レーダーという希少な装備のお陰。この2つを持っていなければ衣笠は今頃間違いない海の藻屑となっていた所だ。

とはいえ追い込まれている状況である事に変わりはない。自身の後方に居る僚艦は駆け出しの駆逐艦が二人のみ。調子に乗って遠出したのが裏目に出た。出来る事なら大袈裟な事態になる前に解決したかった所だが、中破してしまった以上は支援を要請して助けってもらう他に選択肢はない。レ級一隻だけならまだしも最悪の場合『戦姫』と呼ばれる強力な深海棲艦と一緒に行動している可能性もある。

自身の我が儘で幸子と電を沈める訳にはいかない。
「無事に帰れても怒られるんだろうなあ……」

レ級の居るであろう方角に視線を向けつつ、沈んでいく心に合わせるようにハア、と溜め息。気が重くはあるが背に腹は代えられない。ショートランド泊地へと通信を繋ぐ。

『おう衣笠か。今何処に居るんや？新人の訓練は終わったんか？』

通信に出たのは軽空母の龍驤。衣笠が幸子達の面倒を見ている間、彼女は秘書艦をしていた。

「龍驤さん、それが、あの……」

事態は急を要する。自身がどうこうという状況はどうに過ぎ去っているので説明するしかない。まあ、当然ながら……。

『……はあ!?ド阿呆!!何してくれとんねん!』

「だってえー!」

怒鳴りちらされた。そもそも、今回の幸子達の訓練メニューに遠征など入っていないなかったのだ。航行と砲撃訓練。衣笠が提督に指示されたのはその2つだけ。つまりは練習航海に出たのは衣笠の独断。

『だってクソもあるかボケエ! 輿水は少将から、電は大将から預かっとなるんやぞ! あの二人にもしもの事があってみい、衣笠の責任だけじゃ済まされへんぞ!!』

普段なら、衣笠とてこんな独断で行動したりはしない。それもこれも。

「だってえ……提督が……」

『うっさいわ! ええか衣笠、救援がそつちに着くまではおのれが沈んでも二人を守るんやぞ!』

不幸中の幸いは、衣笠が相手にしているレ級の他に深海棲艦の僚艦は見当たらないという事。恐らくこのレ級ははぐれ、だろう。それなら注意を自身に向け、電と幸子を退避させれば活路はある。

「やれるだけやってみる」

通信を終え衣笠は溜め息をつき「だって提督が……バカ」と呟き、未だ健在の自身の主砲20・3cm(2号)連装砲を握り絞めた。



『いいね、二人とも』

衣笠からの避難指示の通信に泣きべそをかき震えながら「はい、なのです」と答えた電。その電とは真逆に「フッフッフ」と自身たつぷりの様子の幸子は連装砲を持ち直し衣笠が居るであろう前方を見据える。勿論助けに行く気満々である。

「電さんは早くチョイスル島まで避難して下さい。後はボクに任せ
て」

幸子の言葉に「えっ」と驚いた様子の電が、行かせまいと慌てて幸子の右手を掴んだ。先程よりも一層涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら必死の形相で縋って来た。

「駄目なのです! 衣笠さんが簡単に中破するほどの相手なのです!

行ったら幸子ちゃんが死んじゃうのです！」

「大丈夫ですよ」と答え、幸子は電の手を退けると両手を腰に当てて胸を張り、フフンっとふんぞり反ってみせる。

「カワイくて完璧なボクが負けるはずないじゃないですか。アイドルは沈まないですよ！」

「待っててください電さん、すぐに戻ってきますね！」と走り出した幸子。電も「でも」と止めようとはするものの、幸子を追う事は出来なかった。レ級という怪物がこの先に居るのかと思うと、足が竦んで前に進んでくれなかったのだ。電と同じ駆け出しのハズの幸子にどうしてあんな自信があるのか分からず困惑し暫くその場に立ち尽くしていた電だが、思い出したように後退、泣き顔はそのままにチョイスル島へと向かう。電には今は身を隠し脅威が去るのをじっと待つ事しか出来ない。

「お父さん、お母さん、電は……弱い子なのです……」

そんな電と反対に。海上を軽快に走る幸子。見据える先には衣笠、それと未だ見ぬ踏み台（と幸子が思っている）深海棲艦が居る。ベテランであろう衣笠が苦戦し電が恐怖するような相手を自分が呆気なく倒す。そして皆にチャホヤされる。そんな姿を想像しほくそ笑む。

「こういうの何ていうんです……無双、でしたっけ？」

異世界ものではよくある話だ。こうして強敵が直ぐに現れる所も同じ。ならば自分もチート能力であつという間に倒せるに違いない、そう決まっているのだ、何せこの異世界ものの話の主人公は自分なのだから。と何処から来るのか分からない根拠の無い自信に溢れた幸子の視界に、微かに2つの影が見えてきた。

一つは頭からフードを被り、真っ白で太く長く先端に異形の頭が付いている不気味な尾を持つ青白い肌の少女。その瞳は不気味に紅く光り、身体は紅色のオーラを纏っているように仄かに光っている。恐らくアレが『レ級』だろう。

もう一方は衣笠。血に染まった右手に持つ砲はひしゃげて使い物にならず、背中の艤装も半壊。あれでは恐らくその場から動く事も出

来ない状態だろう。左手で右腕に受けたであろう傷の辺りを抑え、完全に座り込んでしまっている。影になっていてよく確認は出来ないが、左脚に深い傷を負ってしまっているようで立つ事すら困難なようだ。幸子が来たタイミングはどうやら間一髪の場面らしい。

これが、トドメになった。シチュエーションも完璧。これで幸子は『自分が主人公なのだ』と確信を持ってしまったのだ。

「フツフツフツ……このボクが来たからにはもう大丈夫ですよ衣笠さん！」

幸子が居る事に慌てた衣笠が声を振り絞って「幸子ちゃん!? 来ちゃ駄目だよ! 逃げてっ!」と叫んだが、全て後の祭り。幸子の存在に気付いたレ級は視線は衣笠に向けたまま、その尾が海面から離れ先端の異形の頭が幸子の方向に向けられ、その口が開いた。

次に幸子が気付くと、目の前に海面があった。「え……あれ……?」と暫し混乱。数分の後、ようやく『海面にうつ伏せに倒れている』という事実気付く。

「どうしてボクは寝て……? 早く起きて衣笠さんを助けないと……」

しかし、どうにも身体に力が入らない。やっとの思いで右手を顔の前まで持って来た所で、異変に気付いた。

「……え……え……」

幸子の右腕は、衣笠のそののように血塗れだった。持っていた連装砲もなくしてしまつたらしく、影も形も見えない。

左腕は骨が折れているらしく、全く動かせない。背中の艤装も、ベルト周りの部分を残し大半が吹き飛んでいて使い物にならない。

左目は液体のような何かが付いていて見えない。それは額、というより頭の方から流れて来ている液体。その嫌な感じの汗のようなものを震える右手で拭ってみると、赤い……やはり血。

「え……」

左腕に引つ掛かっていた機銃をどうにか右手に持ち変える。何が起きたかはまだ理解出来ないが、こんな所で寝ている訳にはいかな

はもうそんな事を気にする余裕は皆無。

理解出来たのは、今が絶望的な状況だという事。

そう、幸子はレ級の砲撃を左脚付近に受け、大破。挙げ句、左脚太股に着けていた魚雷が誘爆。左脚を中心に左半身にダメージを負ったのだ。お陰で艦装もほぼ吹き飛ばされてしまった。

まるで子供が泣き喚くかのように、右手の機銃を無闇に撃ちまくる。レ級はと言えばその装甲の前にそんな物は全く意味が無く、蚊に刺された程度の反応しか見せていない。

「どう……して……ボクはチート持ちのハズじゃ……」

遂に幸子の目の前まで来たレ級はニヤリと笑うと幸子の首を掴み、海面から持ち上げた。これから起こるかも知れない事を思うと、嫌な汗が止まらない。

直後、不意に右手が引つ張られる感覚。幸子は何が起きたのか分からなかったが、こんな時だからこそ『とある事』を思い出した。

とある番組で確かこんな事を説明していた。サメに食べられた時、その歯のあまりの鋭さに人間は引つ張られたような感覚をおぼえる……。

ゆつくりと右手に視線を向けると、やはり。幸子の右手は、持っていた機銃もろとも手首から先が無くなっていった。レ級の尾の異形の口から、幸子のものであろう血が滴り落ちてるのが見える。

逃げようにも全身から力が抜けて抵抗出来ない。恐怖し泣く事しか出来ない幸子の目に、尾の異形の顔が少しずつ迫ってくるのが映る。

「……うそ……ですよね……?」

異形の口が大きく開かれ、幸子の顔に少しずつ迫ってくる。幸子には「助けてプロデューサーさん……助けて白露さん……」と祈る事しか出来なかった。

11話 主人公が強いなんて幻想である

「……………うそ……………ですよね……………?」

視界に迫ってくる、非常に鋭い歯が並んだ異形の口。実際の時間は一瞬であろうが、幸子には恐ろしく長い時間を感じられる。

今にして思えば、これまでの人生は出来過ぎだったのかも知れない。幸子がプロデューサーにスカウトされてから、まだ一年すら経過していない。にも関わらず、現状の幸子のアイドルとしての知名度は高い。入れ替わりが激しく陽の目も見れない者達がごまんと居る芸能界で、トップアイドルとはまだ言えないが間違いなく成功している部類に入る。自分の事を『カワイイ』と宣言したり（とはいってもアイドルをしている以上、幸子が可愛いというカテゴリーに入るのは間違いないが）と元々自信過剰な所があった幸子を更に調子付けせるには充分過ぎる状況だ。

だが、今にして思えばその成功が良くなかったのかも知れない。元居た世界で刺されたうえ、こうして今死に直面している。下積み期間も殆んど無くアイドルとして早々に成功した代償に、人生の運を使い果たしてしまったかのようだ。

ゆつくりと口を開きながら迫ってくる異形の頭。その幾重にも付いた鋭い牙を見ながら、これ迄の生活やプロデューサー、アイドルとしての活動が頭を過る。これが世に言う『走馬灯』かと感傷に浸る余裕など当然ある筈もない。こんな時だからこそか、何時だったか忘れてたが敵に頭を食われて死んだ魔法少女アニメのキャラを思い出して更に大粒の涙を溢し、ガタガタと震える。

「たひゅ……………たひゅけて……………」

アニメのコマ送りのように、ゆつくりと近付いてくる牙。噛まれたら痛いどころでは済まないだろう。生きながら頭を噛み砕かれるのがどれ程の絶望と苦痛を運んでくるのか想像も出来ない。

大きく開いた口はもう目の前。鋭利な牙が幸子の瞳のすぐそこにある。もう駄目だ、と恐怖で目を瞑った幸子の耳に、突然の爆発音が聞こえた。同時に右肩に感じた事の無いくらいの恐ろしい痛みが走

くレ級に向かい『Feuer! Feuer!』と砲撃。ドイツ語……だろうか。

金髪の女性がレ級に向かい魚雷を放つ。それに合わせ別の二方向からもレ級に向かい魚雷が走り、その全てが直撃。あれだけの威圧感と絶望を振り撒いていたレ級が呆気なく海底に沈んでいく。

惚けその様子を眺めていた幸子だが、やっと我に返りある異変に気付いた。あれだけ感じていた激痛が和らいでいる。傷が回復している訳ではないものの、流血もかなり収まっている。その代わりに幸子の身体の上を妖精が数人動き回っているが。

「もう大丈夫!」

幸子を抱えた少女がニッコリと微笑んだ。どうやら命が助かった事を理解した幸子は、安堵と共に意識を手離した。



「……はっ!」

幸子が目覚めると、浴槽の中だった。酷く恐ろしい夢を見た。左足を失い、右の掌と右肩を食い千切られ、挙げ句激痛まで感じるということでもない悪夢だった。恐る恐る右肩を触り、右掌があるのも確認。左足だってちゃんとある。無事なのを再確認しホッと安堵したのも束の間。今居るのが入渠施設だという事に気付きその心は曇る。

「はあ……ボクの身体に戻ったってわけではなさそうですね」

浴槽から出て鏡の前へ。映っているのは当然艦娘・弥生の姿。元の世界に戻れた訳ではない事に落ち込んで項垂れて、再び浴槽へと戻り湯に浸かる。

……と、突然、勢いよく入渠施設の扉が開かれた。ビクツと震え音の方に視線を向けた幸子に向かって、白露が走ってくる。

服を着たままバシヤン、と勢いのまま浴槽に飛び込んだ白露が、幸子を抱えあげ抱き締めてくる。幸子は入浴していて裸な訳で、正直痛いし恥ずかしい。

「ちよつと白露さん!痛いですって!」

「良かった、幸子ちゃんが無事で良かったよう」

無事で良かった……その言葉に幸子は血の気が引いていくのが

分かった。確認するまでも無く、レ級との事は現実だったのだ。もう少しで死ぬ所だったのも、食い千切られたのも現実。

「あの……白露さん？」

恐怖が甦ってくる。身体の震えが止まらない。あんな化け物と戦うなんてどうかしている。もう二度とやりたくない。

「衣笠さんと電ちゃんなら無事だよ。衣笠さんは提督と一緒に沖立少将にお説教されてるよ」

二人が無事だったのは喜ばしい事だし、身体の傷が何事も無かったかのように回復しているのも良い事だ。だが、幸子が言いたいのはそこじゃない。……本当に死ぬかと思った。生まれて初めて絶望というものを味わった。

「白露さん、ボクは……ボクは……」

目に涙を浮かべ声を震わせ始めた幸子に気付いたのか、白露はそのまま頭を撫でてきて、器用にポイポイとその場で服を脱いで一緒に浴槽に浸かってくれた。

「うん、大丈夫だよ幸子ちゃん」

落ち着くまでずっと手を握ってくれていた白露の事は有り難かったものの、本当は幸子はその役はプロデューサーであって欲しかった。

幸子が浴槽からあがって更衣室へと入ると、誰かに突然顔面に何かを投げつけられた。「ぶはっ」と声を洩らした後に投げつけられた物をよく見てみると、弥生の制服一式。

投げつけて来た人物の方を見ると、卯月だった。その表情は如何にも不服そうな不満顔。

「コラ興水幸子、お前が死のうがうーちゃんは知ったこつちやないぴよん。でも弥生の身体を殺すのは絶対許さないっぴよん」

そう鋭い視線で幸子を睨む卯月。「ヒッ」と恐怖し白露にしがみつくが、肝心の白露は助け船を出すどころか苦笑いしているだけ。

そんな白露と幸子にフイ、と背中を向けて更衣室から出ていく卯

月。「どうして営倉？から出てるんですか!？」と訴える幸子だが、白露の様子は苦笑いから変わらない。

今日は散々な日だ。レ級に襲われ死の恐怖を味わったばかりでなく、卯月が自由の身になって敵認定された。異世界ものの主人公がチート持ち、とは一体なんだったのだと心の中で溜め息をつく幸子。白露の「卯月ちゃんも素直じゃないよね」という呟きは耳に入っていないかった。

12話 再起動

幸子が着替えを終えて扉を開けて更衣室を出ると、風雲の姿が見えた。向こうも此方に気付いて手を振っている。

「二人ともやっと出てきたわね」

どうやら幸子を待っていたらしい風雲が、ゆっくり歩いて近付いてくる。心配してくれていたのだろうか……とも思えたがどうも違うらしい。

「ちよつと幸子ちゃんに話があるんだけど。白露は席を外してくれる？」

白露が居ると話し難い用事。どうせ幸子に拒否権など無いだろう。不安を覚えつつも、幸子は風雲の後を付いていく。

「そんなに緊張しなくても平気よ、悪い内容じゃないから」

少しだけホツとした。練度が低く明らかに足手纏いだったにも関わらず無謀にもレ級に突撃、あっさりやられて死に損なったのだからつつきり怒られるものだとばかり思っていたのだ。今回は別の案件という事だ。もしかしたら帰り方が分かったとかそういう明るい内容かも知れない。

「風雲さん……でしたっけ？ボクに何の用なんですか？」

「あそこで話そっか」

風雲が右手で指し示したのは小さめの会議室のようだ。やはり周りには聞かれると不味いような内容なのだろうか？

風雲は扉に手を掛けノブを回し、先に中へ。幸子も無言でその後から部屋へと入った。

「適当に座ってて」という風雲に「あ、はい」と素っ気ない返事をして、その辺に横1列に並べてあったパイプ椅子の真ん中らへんに座る。風雲が幸子と一つ席を空けて左側の椅子に座った。

「ええつと……先ずは幸子ちゃん、危険な目に遭わせちゃってごめんね。本来なら提督から話す事なんだろうけどホラ、幸子ちゃん緊張しちゃうだろうから」

「あ……いえ、ボクなら大丈夫ですから」

沖立少将に気を使われたようだ。少将と面会した時は確かに自分でも分かりやすいくらい緊張していた。それにあの威圧感のある秘書艦の不知火の目が無いのも、歳も近く話しやすいであろう風雲を乗り越してくれたのも幸子には助かる。

「それでね幸子ちゃん。今後の事なんだけど」

幸子に一任される予定だった今後の所属。しかしながらレ級の件があつた為、沖立少将は幸子を内勤にするつもりだったらしい。幸子は妖精に見出だされた訳でもないし自ら志願して艦娘になった訳でも無い。そんな、深海棲艦と戦う覚悟をしていない幸子にはレ級との一戦は精神的に相当堪えたに違いない、深海棲艦に対しどうしようもない恐怖を覚えてしまってもおかしくはない、という判断だ。

「シヨートランドで少し頑張ってみない？」

「ここで……ですか？」

「そう、ここで」と笑みを浮かべ頷く風雲。どうやらその提案をしたのは卯月らしい。

「卯月ちゃんがね、『うちちゃんが鍛えるつぴよん。だからもう少しだけ輿水をシヨートランドに置いて欲しいつぴよん』って」

幸子には意外であつた。初対面で首を絞められ、先程の捨て台詞もあつて幸子は卯月に仇敵だと思われていると思つていたからだ。

「それで納得したんですか!?ボクが卯月さんに殺されたらどうするんですか!？」

ガバツ、と風雲の方へと身を乗り出して抗議するが、決定は覆らない。風雲は「それは心配ないと思うよ?」とさして気にしていない様子。

「まあ前のような事にはならないと思うから。卯月ちゃんが幸子ちゃんを手を掛ける、って事はないと思う」

卯月が営倉を出されたのもそれが理由のようだ。ついさつき卯月が言っていた『弥生の身体を殺すのは許さない』という事を信用しろ、という事か。頭では理解出来ない事も無いが、幸子の心の方がついていけない。まだ卯月を見ると恐怖を覚えるくらいだ。

「卯月さんと上手くやれる自信なんて有りませんよ……」

芸能界のいざこざなら持ち前の凶太きでどうとでも耐えられるが、自分を殺そうとした相手となれば話は別だ。出来る事なら幸子がショートランドに残り卯月が異動、となれば言う事は無いのだが。

「それに……アイドルとしてなら自信が有りますけど、ボクは艦娘としては弱いですし……皆さんの役になんて立てませんよ」

表情も暗く、俯く幸子。

今回ばかりは幸子も弱気だった。チート能力も無い、敵にロクにダメージを与えられない自分。それに引き換え、幸子を助ける為に突っ込んで来てくれた銀髪の少女は比べるべくもなく強かった。幸子が自信を完膚無きまでに打ち砕かれたのは、実はアイドル活動も含めてこれが初めてだった。かといってすぐに元の世界に戻る訳でも無いので、この世界で生きていかななくてはならない。それは今の幸子にとって『艦娘として海軍で働く』という事だ。初めて挫折を味わっている最中の幸子には、それは辛い現実でしかなかった。

「あー……まあそうだよ。うん、私も昔はそうだったから分かるよ」

苦笑いに変わった風雲の言葉に、ふと幸子は顔をあげた。

「……風雲さんが、ですか？」

強力な呉の艦隊を指揮する司令塔の風雲。俄には信じられなかったが、風雲によれば彼女も元々は自分に自信が無く、運動音痴で訓練でも周りの艦娘達の足を引っ張る落ちこぼれだったらしい。それが縁あって呉鎮守府へと異動。沖立少将らに見出だされ、風雲自身も必死の努力を重ねた結果として今の彼女がある。

「そうそう。だから幸子ちゃんもこれからの自分次第だよ。無理する必要は無いけど、少しだけ頑張ってみない？」

成る程、沖立少将が風雲を寄越した意味が幸子にも少しだけ分かった気がした。確かに深海棲艦は怖いが、ここまででもらって断るようでは『アイドルとしての幸子』が廃るというもの。不安が解消された訳ではないが、ここは領いておくところだろう。どうせ今の幸子には海軍以外の選択肢は無いのだ。

「……仕方ありませんね。それなら少し頑張ってみます。何せボクは輿水幸子なんですから」

「まだぎこちない営業スマイルを風雲に向け、幸子は椅子から立ち上がった。そうと決まれば今やれる事を纏めておかなくてはならない。「ありがとうございます、風雲さん」と会議室を出ようとした幸子を、風雲が「ちよつと待って」と呼び止めた。

風雲は、自身の髪をポニーテールに結わえているリボンを外した。先端に赤いラインが三本入った山吹色のリボン。

「このリボン、少しの間幸子ちゃんに貸しておいてあげる。妖精さんが作った勇気が出る特殊な装備だから」

「……ありがとうございます」

勿論、そんなご都合主義的な装備がある筈はない。そのリボンは風雲がとある艦娘から貰った普通のリボンだ。しかしそんな事は知らない幸子からすれば、今後を何とか乗り切れるかも知れないキーマイテムのように思えるだろう。

「幸子ちゃん、頑張つてね」と手を振り見送る風雲を背に、幸子は会議室を後にした。

自分の……もとい弥生の部屋へと戻つて来た幸子は、一冊のノートを広げた。今やらねばならない事を書き連ねていく。

「先ずは最低限艦娘として動けるようにならないと。あ、それに元の世界に戻れた時の為に何時もやってるレッスンもやるとして……」

貰ってきた、艦娘としての訓練のスケジュール表を見ながら、一日の行動予定を立てていく。元の世界ではスケジュール管理はプロデューサーがやってくれていたが、ここでは幸子が自分でやらねば誰もやってはくれない。

あんな事もあったお陰か、今日はこれからの予定は特にない。向こうの世界でやり途中だった新曲のレッスンでもしようかと制服を脱ぐ為にスカートに手を掛けた。



「ごめん……なさい……」

司令室。しゅん、と小さくなつて床に正座しているのは衣笠。消えるような声で謝っているのは勿論レ級との一戦の事だ。

「どうして遠征に出たりしたんだ？ 普段の衣笠ならそんな事はしないだろう？」

プロデューサー似のショートランドの提督が、できる限り柔らかい口調でそう語り掛ける。先程沖立少将や不知火に散々怒られたのだしこれ以上怒つても仕方ない、それよりも衣笠が独断で行動した動機を突き止めておく必要があると考えての事だ。

「それは、その……」とあまり言いたくない様子の衣笠。

ソファに座り紅茶を飲んでいた鈴谷はそんな二人を交互に見て「ほんと、少佐つて鈍感だよねえ」と呆れた様子。

「鈍感だと？ 鈴谷には理由が分かるのか？」

「少佐つてき、漫画の主人公か何かなの？ どんだけ鈍感なの？」と言いつつ鈴谷はその視線を衣笠へ。気付いた衣笠の表情が真っ赤に染まる。

「まー鈴谷が言っちゃつてもいいんだけどさ、こーゆーのは自分の口で言いたいものじゃん？」

ニヤニヤしながら衣笠を見た鈴谷は「ちよつと幸子ちゃんの様子でも見て来よつと。それじゃお二人さん、ごゆつくり」と一人退室。残された少佐と衣笠の間に気まずい空気が流れる。

「衣笠、それでどういう」

「えつと……今言わないと駄目？」



コンコン、とノック音。ジャージ姿に着替えていた幸子が扉を開くと、鈴谷が立っている。隣には白露の姿もある。

「幸子ちゃん、ちーつす」

「あれ？ 幸子ちゃん汗かいてる？」

白露が気付いた通り、幸子は先程まで自主レッスンをしていた。この弥生の身体でも幸子の持ち歌は一通り覚えてるし、身体も動いてくれる。幸子の魂が記憶しているのだろう。弥生の身体が142cmと幸子の元の身体と同じ身長、同じサイズだったのも幸いしている

か。

「今レッスンしてた所だったんですよ。あ、お二人ともその辺に座っててください」

テーブルの辺りに二人を座らせ、何か飲み物は無いかと備え付けの冷蔵庫を探す。

「あーそっか。幸子ちゃんって向こうの世界のアイドルだもんね」と納得した様子の白露と「えっ？幸子ちゃんってアイドルなの!？」と少しばかり驚いた様子の鈴谷。

2L入りの緑茶のペットボトルを見つけ、グラスを3つ持ってテーブルの方へと戻った幸子。久々の反応に「そうですよ！ボクは向こうでは（多分もうすぐ）トップアイドルだったんです！」とエヘンと胸を張ってみせる。

「そうだ幸子ちゃん。何か向こうの曲聞かせてくれない？」

少しでも元気を出してもらおう、という白露の思惑の込められた提案を、幸子は「任せてください！ボクが一番カワイイって所を見せてあげますよ！」とそれとは分からずに引き受けた。

「それじゃ何にしましょうか……そうですね……『T o m y darling…』にしましょうか」

時間にして数日振りという短期間。しかしながら幸子はひどく久しぶりにアイドルとしての自分を取り戻した気がした。

13話 真の実力

「よし、二人ともそこに並ぶつぴよん」

翌日。

シヨートランド泊地の演習用海上。各々艤装を身に付けた幸子と電が、卯月と向かい合って立っていた。勿論、これから卯月の教導を受ける為だ。

「では電、砲撃の基本を言ってみるつぴよん」

「はわわっ……目標を決めて、仰角を決めて、初弾を観測して、二発目で修正して……散布界内に収めて……」

電の言う事は間違っていない。基本、駆逐艦娘の装備は連装砲。撃ち出す角度と目標を決め、初段を撃ちそれを観測、二発以降で目標を散布界に収めるよう修正して夾叉になるように撃つていけばいいかどうかは当たる、という理屈だ。しかし、卯月は口をへの字に曲げたまま。

「……輿水は何かあるつぴよん？」

「あ……いえ……」

突然卯月に質問を振られたが、ハッキリ言っただけ幸子にはチンプンカンプンだ。弱気ではあるが真面目っぽい電が答えているのだから、きつとそれが正解なのだろうという程度の考えしかない。

卯月は「ハア〜」と盛大な溜め息。ギロリ、と二人を睨む。電は怖くなって視線を逸らし、幸子はビクツと身震い。

「お前らそれでも駆逐艦つぴよん？」

「ですけど！ボクは」と言いかけた幸子の事を無理矢理遮り、卯月は「ぜんっぜん駄目つぴよん」と呆れて舌打ち。電は下を向いてしまい、幸子は卯月の事が怖くなって腰が引ける。

「呆れてものも言えない。お前ら……まあ試しにそれうちちゃんに向かってやってみせろつぴよん」

そう言うと、卯月は二人から離れ距離を取る。やってみせろ、と言う方からは卯月に向かって撃てという事だ。だが、卯月の弾が演習用のペイント弾なのに対し、幸子と電の方は実弾。万が一卯月に当た

りでもしたら大事だ。二人がそう躊躇し戸惑っているのを見抜いてか、卯月は遠方から通信を飛ばしてきた。

『早くやれっぴよん。撃たないと今日のお昼抜きだっぴよん』

お昼抜き、と言われて渋々動き出す二人。電が慎重に卯月に狙いを定めている横で、幸子は両手で構えた砲を適当に卯月に向けて撃つた。

今度も当然当たる、悪くとも例の散布界なるものの中には収まると思っていた幸子だが、初撃は全く掠りもせず卯月の遥か右の前方に落ちた。チート能力は無くとも射撃くらいは出来る、と前回の事でまだ勘違いしていた幸子が「あれ？」と首を傾げると、『くおくら輿水！ドコ狙ってるっぴよん！』と通信で罵声が聞こえてきた。

「え？だって卯月さん！ボクの砲撃の腕なら本来は……」

『黙れ！弾を無駄にするなっぴよん』

再び浴びせられた罵声に、ムツとした幸子は立て続けに砲撃。しかしどれもこれも卯月から遥か離れた位置に落ち、至近弾どころか散布界にすら入れられない。

「あれっ？えっ？」と混乱している幸子の横で、慎重に慎重を重ねた電が砲撃。しかしそれも卯月には掠りもしない。それに、今さっきまで居た場所に卯月の姿が見えない。

「はわわっ」

「あれっ？卯月さんは何処に行っただんですかね？」

完全に見失った二人の右舷側から、風を切る音が微かに聞こえた。ペシヤツ、と何かが幸子の右肩に当たる。当たった部分の服が濡れたようで、肌張り付いて気持ち悪い。

「……うわっ、何ですかこれ？」

幸子の右肩には、ピンク色の液体が付着していた。「ペイント弾なのです!？」と気付いた電の言葉で、幸子も状況をやつと理解した。右を向いてみると、卯月が砲を構え迫ってくるのが見える。これ以上被弾しては堪らない、と幸子は何度か砲撃してみるが当然全てハズレ。代わりにペシヤツ、ペシヤツ、と卯月のペイント弾二発を背中中の臙装と顔に被弾。

「ぶふおっ!」と口に入ったペイントを吐き出した幸子に『輿水はこれで轟沈判定だつぴよん』と吐き捨てた卯月は、今度は電に向かってくる。今度も慎重に、よく狙いを定めている電が砲を放つ前に卯月は躊躇なく二発砲撃。ペシヤツ、とペイント弾は電の頭に浴びせられ、次弾のペイントが電のお腹に施された。

ペイントが頭から垂れてきて涙目になっている電と、顔じゆうピンク色のペイントでコントのオチのような状態になっている幸子の元に、卯月が戻ってきた。二人の不甲斐なさに呆れた様子の卯月は、再び大きな溜め息をついた。

「はあ……。おい、糞雑魚駆逐艦共。よく聞くつぴよん。電の理屈は間違つてはいないつぴよん。でも深海棲艦相手にそれをやったら、今みたいにあつという間に轟沈つぴよん」

今にも泣きそうな電をチラリと見て、言いたい放題の卯月に向かって幸子は怒りに任せ「じゃあどうしろって言うんですか!」と怒鳴る。卯月はギロリ、と幸子を睨み、幸子は「ヒツ」と情けない声を出して思わず後退り。

「輿水はやつぱり馬鹿つぴよん。答えは簡単、素早く撃つて全部当てればいいつぴよん。駆逐艦の本分は、接近してありつただけの火力を叩き込んで、魚雷で敵を仕留める事。お前みたいなヘツポコじやイ級一匹すら沈められずに轟沈つぴよん」

変わらず下を向き泣くのを必死に堪える電と、言われ放題で頬を膨らませるが怖くて視線は合わせない幸子。この二人の根性を叩き直すのは苦勞しそうだ、卯月は本日三回目の溜め息をついた。

「戦場で電が言ったような事をやってたら、駆逐艦の装甲じやあつという間に轟沈だつぴよん。隙を作るな、海上で一ヶ所に留まるな、撃つたら必ず当てろつ」

遂に泣き出した電を横目に、幸子の頬は一段と膨れる。そんな事は今初めて聞いたし、幸子は艦娘初心者だ。卯月の言葉は理不尽以外の何物でもない、と段々と怒りが大きくなってきた。

「そつ……そうは言いますけど!ボクは初心者なんですすよ?幾ら天使のごとくカワイイボクでも出来るわけないじゃないですか!」

「……はあ？」と卯月に睨まれる。幸子の怒りは一瞬で吹き飛ばされ、卯月の怒りが籠る表情に呆気なく怖じ気づく。やはり怖いものはまだ怖い。

「輿水、お前……そんなド素人の癖にレ級に向かっていったの？……うーちゃん今日はもうやる気失せたっぴょん」

クルリ、と二人に背を向けた卯月。二人を見ないまま「今日は二人とも何処が悪かったか反省文提出っぴょん。続きは明日っぴょん」と言つて泊地へと引き揚げていく。「そのザマで弥生の身体を危険に晒したなんて……」と呟いたのは、電と幸子には聞こえていない。

暫し呆然としていた二人だが、遠く小さくなつた卯月の背を見て慌てて泊地の方へと引き揚げる。「ヒック、グスツ」とまだ泣き止まない電に「だっ……大丈夫ですよ電さん！ボクだつてほら……ちよつと怖かつたですし！それにホラ！卯月さんも理不尽だつたじゃないですか！」と必死に慰めてみる。しかしというかやはりというか、電は岸に着くまで泣き止まなかつた。



「反省文、つて何書けばいいんですか……」

提出、と言われても艦娘になつたばかりの幸子だけではどうにもならない。何せ艦隊戦や対潜哨戒といった基礎知識はゼロ。戦艦と空母の違いすら理解していないのだ。幸子を快く思っていないであろう卯月を納得させるような物を書くなど流石に不可能に近い。

背中に艤装の重さを感じながら、柄にもなく「はあ」と溜め息をつき、どうしたものかと考えながら歩く。電に聞くのは気が引ける、というか聞ける雰囲気ではなかつた。電の落ち込みようは中々に酷いものだった。幸子の手には負えないと判断し風雲に任せたくらいだ。

工廠に着いた幸子は妖精達に背中の艤装と連装砲を預け、出入口の傍に置かれたパイプ椅子に腰を下ろし暫し悩む。

「明石さん……は論外として。やっぱり白露さんに相談するべきですかね」

やはりここは白露を頼るべきだろう。この泊地で最も仲が良い……と言っても幸子が話した艦娘といえば白露と明石以外では卯

月、衣笠、不知火、風雲、鈴谷くらいなものだが。

「あれ、幸子ちゃん？もう訓練終わったの？早くない？」

顔をあげその声の方へ向ける。居たのはやはり白露だ。白露は今日も呉艦隊と演習で、終えて艀装を預けに来たようだ。本来ならば呉艦隊は電を衣笠達に預け、昨日のうちにショートランド泊地を後にする予定だったのだが幸子達の件があつてもう1日の滞在となつていた。幸子がレ級から助けられた時、呉艦隊は帰路に着いていた途中。もしもあの時呉艦隊が海上に居なかつたら、幸子も電も衣笠も今頃は海の底だつただろう。

「何かあつたの？訓練が上手いかなかったとか？」

心配そうに幸子の顔を覗き込んでくる。こんな時でも自尊心は幸子の邪魔をしてくる。慌てて営業スマイルを作り「フフーン、カワイイボクが上手いかわけないわけ無いじゃないですか。それはもうカンペキな訓練内容でしたよ」と要らない見栄を張ってしまった。勿論内心では（あああつ、ボクのバカあ！何で正直に言わなかつたんですかあ！）と後悔している。

「うーん……幸子ちゃん、ちよつといい？」

「はい？」

言うと同時に白露はヒョイと幸子を持ち上げ、初めて会った時のようにお姫様抱つこでガツチリホールド。「ちよつ、離してください！」と手足をジタバタさせて暴れる幸子などモノともせずそのまま歩きた。何時もながら白露のその細腕のどこにそんな力があるのだろうか。

どうやら向かう先は艦舎のようだ。

「幾らボクがお姫様のようにカワイイからってこれは恥ずかしいんですからね！」

「何か悩みがあるんでしょ？お姉さんに任せなさい」

白露にはお見通し、という訳ではない。幸子がどんなにスマイルを作ろうとも、顔と雰囲気「悩みがあります」と出てしまっているのだ。幸子本人が幾ら隠そうとしても態度に出てしまえば隠せない、そんな所も『アイドル輿水幸子』の魅力の一つなのだが、如何せん本人は

その事に気付いてはいない。

途中すれ違う艦娘達の注目を集めながら、白露の部屋へ。確かに幸子はアイドルだし注目される事には慣れているが、こういう恥ずかしい注目のされ方は勘弁して欲しい所だ。

好奇の的になった少し顔の赤い幸子は白露の部屋のベッドへと放り投げられ、やっと解放された。ここまで初日と同じ流れだ。その初日の意趣返しなのか、白露はニヤニヤしながら両手の指をワキワキさせながら少しずつ近付いて来る。

「さーて幸子ちゃん。本当の事言わないと乱暴しちゃうよ? ……エロ同人みたいに!」

「ヒッ、ヒイイイ!? 止めてください白露さん! ボクはノーマルなんですうっ!!」

……白露の部屋の中に「あひやひやひやひやっ!? やめて、やめてください! くすぐったアヒヤヒヤヒヤヒヤっ」というくすぐりの刑を実行された幸子の笑い声が響く。当然幸子は陥落し、白状させられる事となった。



工廠の奥。

両肩に妖精を1人(?) ずつ乗せ、作業台を前に腕を組み「うーん」と明石は唸る。

未だに弥生と幸子が入れ替わった原因は分からない。二人の個人データ(身長、体重、スリーサイズ)がほぼ一致しているのが判明しているくらいしか分からない。他には二人が同時に瀕死になっている事くらいだ。今の状況ではとてもではないが元に戻す為の切っ掛けすら掴めない。艦娘、艤装の様々な事象に向き合って来た明石にもさっぱりな事態だ。

「困りましたね。平行世界の人間の魂が次元の壁を越えてくる、なんて本当に出来るんでしょうかね?」

14話 訓練開始

「はあ」

幸子は深い溜め息をついた。本当なら今頃は新曲の打ち合わせをしていた筈だった。それが、艦娘とかいう得体の知れない者になつてこうして海上に浮かんでいる。

百歩譲つて、海の上を走るのはまだいい。普通の人間ならば絶対に体験出来ない事だ。しかし幸子が問題としているのは、今から始まる訓練でありその教官が卯月だという点だ。

「どうしてカワイイボクがこんな事に……」

『溜め息つくなっぴよん。いいか輿水、お前は今からうーちゃんの砲撃をひたすら避け続けるっぴよん。5回連続避けられれば今日は終わりっぴよん』

聞こえて来た卯月の通信。卯月は幸子から1キロ程度距離を取り砲を構えていた。素人である幸子は、1キロも離れた位置から狙うなど不可能だと思つている。卯月の訓練の意図は全く分からない。理不尽な理由を付けられ、卯月にいびられでもするのではないかと不安で仕方ない。何せ卯月は幸子の存在を快く思っていないのだから。肉体的ではなく精神的に何かされるに決まつている。

「あんな遠くからなんて当たるわけ無いじゃないですか……」

幾ら卯月がベテランでも流石に当てられるわけが無い。そう慢心し、再び溜め息。「こんな事よりレッツスを……」と愚痴つた所で、卯月から『よし、始めるっぴよん』と合図が来た。

「分かりましたよ、やればいいんですよ？」

どうせ当たらない、と適当に旋回し始めた幸子の耳に砲撃音と風を切り裂く音が聞こえる。次の瞬間、幸子の顔面に何かが直撃。「ぶふおっ!」とアイドルがあげてはいけない声を出した幸子の顔には何かの液体がベツトリと付着。着ていた制服やら艤装やらもそのピンク色の液体でベツトリと濡れていた。

「ゲホッ、ゲホッ、オエエエ、オエエエエツ」

口の中にまで入つて来た液体を吐き出し、思わず両手で顔を拭つ

た。当然ながら幸子の掌もピンク色に染まる。演習用ペイント弾。幸子が不可能だと思っていた距離から、卯月は見事に当てて見せたのだ。

「何で当たるんですか……」

『くおーら輿水！真面目にやれっぴょん!!』

通信機の向こうで叱責している卯月の実力に驚愕。まさか本当に当ててくるとは思わなかった。

全身ピンク色に染まった、ネタの後のお笑い芸人のような状態の幸子はやっと理解した。これは真面目な訓練なのだ。

「分かりました。避ければいいんですか。真面目にやればボクでもそのくらい」

今度は油断しない。『次いくっぴょん!』という卯月の声を確認し、船速を上げて大きく移動し始める。的を絞らせないように不規則に動けば、幾ら卯月でも当たれるわけが無い。

……と思っていたのだが。

バシヤツという音と共に、幸子の右半身にピンク色の液体がまとわり付いた。それでも当ててくるなんておかしい。きつと誘導弾か何かに決まっている、やっぱり幸子をいびる為の訓練に違いないと思いつ視線を海面に落とした幸子は、辺り一面にピンク色の液体が浮いている事にやっと気が付いた。

「何ですかこれ」

『散布界に決まってるっぴょん。その範囲に居るって事は被弾する可能性が高いって事だっぴょん。その液体に当たらないように回避するのが今回の訓練だっぴょん』

幸子は思わず「はあっ!？」と声をあげた。見た所、幸子の周辺のみならず広い範囲の海面にピンク色の液体が浮いている。この範囲から逃れるには相当頑張って走らなくてはならない。それも、卯月が撃つ瞬間を狙って全速力でその場から離れる必要がある。

「冗談はよしてくださいよ……こんなの避けられるわけ無いじゃないですか!!」

思わず怒鳴った幸子だが『冗談じゃ無いっぴょん!この程度避けら

れなきやイ級にも勝てないっぴょん！」と逆に怒鳴られ返された。卯月がおかしいと思いたい所だが、艦装を駆る妖精に依ると『出来るに越した事は無い』という返事が返ってきた。本当に出来るまで終われないという事か。

「どうしてボクばかり……電さんは白露さんと訓練なのに」

電は、白露の指導の元で砲雷撃訓練。それも白露の事なので優しく教えてくれているに違いない。一方の幸子は卯月にスパルタ教育。幾ら幸子が素人とは言えあんまりである。

「こんな……ボクのことを無視して辛い事ばかり……」

幸子の気持ちとは関係なく事態は勝手に進んでいく。上手く丸め込まれていつの間にか深海棲艦とやらと戦わなくてはいけない事になっていくし、今行っている訓練もとてもではないが達成出来る気がしない。幾ら幸子がアイドルで常人よりかは忍耐強いとは言え、運命の神とやらは幸子に辛辣過ぎて辛い。

幸子がアイドルとして今までやってこれたのは、漠然とだが自分も主人公的な存在だと思っていたからだ。アイドルとして人を惹き付ける魅力を持ち、歌唱力もダンスの実力も（幸子の中では）あり、何よりカワイイ。その上まだ挫折を経験しておらず順風満帆。これを主人公と呼ばずして何というのか、という状態だった。

しかしながら今の自分はどうか。主人公、という存在とはあまりにもかけ離れた位置にいる。艦娘としてはどう見ても下の下の実力、それも他人の足を引っ張り、僚艦の助けがなければ死んでいたレベル。地味な努力を積み重ねてもアイドルの時のように右肩上がりに成長できるかも分からない。

「プロデューサーさんだったらこんな扱いするわけ無いのに……」

……幸子はこれまでの事を少しだけ思い返す。嫌だと言っているのに怖いと有名なジェットコースターに無理矢理乗せられたり、お化けなんて余裕だと言ったら日本最恐のお化け屋敷に潜入取材させられたり、天使のようだと言ったら調子に乗せられてスカイダイビングをやらされたり、罰ゲームとは言え泥の沼に頭から突っ込まされたり……。

ら云々と複雑な計算の上での砲撃も、最後は結局は本人の腕。とあるビッグセブンの姉妹間で砲撃の精度に大きく差があり、同じ艦装を使っても次女三女の方が長女よりも砲撃が上手かった、という話は父親から聞いた気がする。訓練を繰り返して出来るようになっていく以外に近道など無い。

今まで電がやった砲撃訓練で、最も遠い距離が500メートル。今回はその倍に当たる。500メートルでさえ当てるのには苦労した記憶しかない電には、今の距離は無謀にしか思えない。

「当たるようになってきたら他の距離もやってもらうからね。今は1キロの距離に集中してね」

「はい、なのです」

さつきは大きく右に逸れた。砲をほんの少しだけ左に動かす。「やあ」と撃ったその砲弾は、今度は大きく左に逸れた。距離が遠いぶん、僅かな誤差の修正は難しい。

「また……駄目なのです」

「そんなに落ち込まないで。最初はみんなそんなものだよ」

あの夕立にも一目置かれていた実力者だった母親と比べられているようで、白露の励ましも今の電には辛い。比較される事は分かっている。はいたつもりだったが、いざその状況になるとその辛さは想像以上だ。

電が艦娘に興味を持ったのは、最初は母親への憧れ。少し成長してからは自分を変えたいという思い。ただいざ艦娘になってみると、如何に母親が偉大だったのかが分かった。

はつきり言えば、今の自分は足手纏いだ。艦娘になったばかりの幸子と変わらないレベルの弱さ。電の周りに居る呉の艦娘達のレベルが皆高いのも電自身が余計に弱く見える一因ではあるが。

電が艦娘になる前に母親に連れて行ってもらった居酒屋の、元艦娘である女将が言っていたのを思い出す。

『母親は母親、アンタはアンタよ。そりゃあ比較はされるでしょうけど気にせず気楽にやることね』

彼女の言葉の通り気楽に出来るならどんなに良かったか。

「あの……白露さん、どうして今の訓練が必要なのですか？電は、もう少し基礎を固めた方がいいと思うのです」

「んーと。卯月ちゃんは近々、電ちゃんと幸子ちゃんだけで深海棲艦の討伐をしてもらうつもりみたい。幸子ちゃんにも相応の訓練を受けてもらってるよ。だから電ちゃんも今は目の前の事を頑張ろう？」

一体卯月は何を考えているのだろう。足手纏いの自分と、新米の幸子だけで深海棲艦と戦うなんて無謀以外の何者でもない。あの時レ級がギロリと自分に向けたあの狂喜に染まった瞳を思い出し、恐怖でブルツと身震いする。

「わかり……ました。やれるだけやってみるのです」

口ではそう言ってみるものの、そんな自信は湧いて来ない。今度は僅かに右に砲を動かし撃ってみるも、やはり大きく逸れてしまった。

自分の情け無さに泣きたいのを必死に堪え両目一杯に涙を溜めて、電は再び砲を構えた。



「それで、電の方はどうだつびよん？」

「まだまだ、かなあ」

その日の夜遅く。食堂で紅茶を飲みながら、卯月と白露が昼間の二人の様子を振り返っていた。

「輿水も話にならないつびよん。まるで素人。あれじや的にしてくれって言ってるようなものだつびよん」

「仕方ないよ、幸子ちゃんは実際素人なんだよ？」

二人は幸子と電の相性は悪くないとは思っている。幸子が積極的に動き相手を錯乱し、電が確実に狙って撃沈する。コンビとしては悪く無い。通じるのは精々軽巡相手までだろうが。

「当面の目標は正面海域のポイントCで二人だけで深海棲艦と戦える力をつける事だつびよん」

「そうだね、まああのポイントなら出ても軽巡洋艦くらいまでだもんね」

幸子と電、二人の第一目標のクリア予定まであと一月。最低限の実力まで伸ばせるよう、卯月と白露の訓練計画の練り上げは夜更けまで

続く。

15話 不安

とつくに消灯時間を過ぎた筈の、夜中2時。

幸子はベッドに横になったまま、ぼんやりと天井を見ていた。
眠れない。

明日はいよいよ出撃の日だ。これまで卯月による猛特訓、電との共同訓練をこなす事1ヶ月。敵艦を撃破し戻って来られる最低限の実力は付いた、とは言ってもらえたものの、不安は消えない。それどころか大きくなる一方だ。眠ろうと瞳を閉じると、あのレ級との事が鮮明に思い出されて恐怖が甦ってくる。幾ら他人に大丈夫だと言われても、もしもあの時のような事になったら…….と思うととてもではないが眠れない。どう取り繕っても殺し合い、戦争だという事実は否定しようがない。

「もし…….もしも勝てなかったら…….もしまたアレが現れたら…….」

思い出すだけで冷や汗が流れ、身体が震える。喰い殺されるなんて御免だ。

こんなに眠れないのは、デビュー後初出演した歌番組の前日以来。といってもその時ですら0時前には寝入っていた。だがそれも仕方無いと言える。自分のカワイイさに絶対の自信があつて、『アイドルとして成功するに決まっている』と思っていた幸子が当時眠れなかったのは、もしも緊張して歌詞を間違えたら…….という一抹の不安からだ。要は未経験の世界へ飛び込むので場数が足りなかった故の不安。だが今は違う。何せ自身の生死が掛かっている。アイドルとして歌番組デビューするのは訳が違う。万が一に備えて卯月や衣笠、龍驤も随伴してくれるが、だからといって安心できるものでもない。レ級との時だつて衣笠は『大丈夫』と言ったのにあの有り様だった。今度はあるな化け物に襲われない、龍驤達なら撃退できる、とは言いきれない。

だが幸子は、ふと、ある事を思い出した。そういえば、舞台やライブ等の本番1時間前くらいに、プロデューサーはいつも幸子にささや

かな悪戯を仕掛けていた。コーヒー牛乳だと言われ渡された蓋付きの中が見えないカップに刺さったストローを吸ってみたらブラックコーヒーだったとか、プリンでも食べると言われ喜んで口をつけてみたらカラメル部分が醤油だったとか。『フフーン、プロデューサーさんもやつとカワイイボクにまともな差し入れができるようになったんですね!』といった調子で何時も悪戯に引っ掛かっていた。

今にして思えば、あれはプロデューサーなりに幸子の緊張をほぐしてやろうという意図があったのだろう。事実、その悪戯に幸子が怒ったあとは身体から適度に力が抜けていた。成る程、そういうメンタル部分もプロデューサーがカバーしていたのか。自身の事を良く見て気が付いてくれていたのが嬉しい反面、プロデューサーの掌の上で転がされている感じがして悔しくもある。

「……戻ったら仕返しして絶対プロデューサーさんをギャフンと言わせてやります」

余計な決意を新たにしつつ、幸子は毛布を跳ね除け上体を起こした。弥生の持ち物である寝間着姿のままベッドから降りて、部屋の扉へと歩く。

扉に鍵を掛け部屋を後にする。目指すは食堂。

プロデューサーにされたのと同じ事をすれば少しは落ち着くかも知れないと思っただのだ。

厨房には勿論入れない。しかしあそこには飲み物の自動販売機があった筈。食堂では水か白露持参の紅茶やらしか飲んでいないので確定は出来ないが自動販売機ならコーヒーくらい有る筈だ。コーヒーを飲むだけならコンビニ、という手もあるのだが不安を抱え込んだ顔を見られたくないし誰にも会いたくない。それに本来今は消灯時間過ぎな訳で、こんな深夜に出歩いているのを見つかるのは不味い。

運良くなのかどうかは分からないが、誰とも会わずに無事食堂へと着いた。中へと潜入してみると予想通り厨房の扉は締まり鍵が掛かっているが、自動販売機はその外側にあり使える。電気についていない広い部屋の隅を自動販売機の光が微かに照らしている。夜の食

堂は少し気味が悪い雰囲気だ。

幸子は臆する事無く自動販売機へと歩み寄る。初めてのスカイダイビングの時の方が余程怖かった。それに元の世界で殺されかけた事やレ級に喰い殺されそうになった事を思えば、この程度の薄気味悪さなどどうって事は無い。

幾つか並んだ自動販売機のうちの日当ての一つにお金……幸子の世界の日本の通貨と同じもの……を入れて、日当てのボタンを押す。

ヴーン、と鈍い音を響かせ、自動販売機の中のカップに黒い液体が注がれていく。ピツ、ピツ、ピツ、と注ぎ終わった事を知らせる小さな音が食堂に響く。

暖かいカップに手を伸ばし、一口。幸子の口から漏れた言葉は「ニガイ……」だった。

「全く、なんでプロデューサーさんはこんなニガイの飲めるんですか……」

ブラックコーヒーはプロデューサーがよく好んで飲んでいた。相変わらず大人の男の人の味覚は分からない。だが元の世界から何も持っては来られなかった幸子には、コーヒーは元の世界のプロデューサーと自分を繋いでくれる物のように思えた。

もう一口。だがやはり幸子には苦い以外の感想は無い。思わず顔を顰め「うえ……」という声を出そうかという時。突然後ろから「何してるの？」と声が聞こえた。

まさか声を掛けられるとは思っていなかったのでビクリして思わずカップを落としそうになったが、セーフ。中のコーヒーも無事。振り返ってみると、懐中電灯片手に不思議そうな表情をしている白露が立っていた。

「消灯時間過ぎてるよ？…つまみ食いとかなら感心出来ないけど」「ちっ、違いますよ！喉が渇いちちゃったので何か飲み物を、って思っただけです」

言い訳としては無理があるが、他にいい理由も思いつかない。「ふーん？」と如何にも信じていない様子の白露の視線はカップの中

味へ。飲み物、と偽って実は食べ物をカップの中に隠しているとも思っただろう。

「コーヒー？幸子ちゃんブラック飲めないって言って……ああ、そういう事か」

コーヒーを発見し、何やら一人納得した様子の白露は、幸子の右肩にポンっ、と右手を置いた。その表情はニヤニヤしている。

「そっか、そうだよねえ。幸子ちゃん不安だもんねえ。好きな人の好きな飲み物飲んで落ち着こう、って事ね、ウンウン」

「ちっ、ちっ、違いますよ！ボクは本当はブラック飲めるですよ！フーン、どうですか！カワイイのに大人でしょう？」

幸子の声は上擦り、明らかに動揺して嘘をついたと分かる。ニヤニヤした表情はそのままに白露はゆっくりと幸子の手からカップを取った。

「まあまあ、気持ちは分からなくも無いから。見廻りもうすぐ終わるから、終わったら私の部屋に来ない？」

どうやら白露は深夜の巡回中だったらしい。食堂の外から「白露さーん？誰か居た？」と別の人の声が聞こえる。白露は「幸子ちゃんだったよ」と声を返し、幸子の右手を掴んだ。

「さーて、それじゃ幸子ちゃん、残り箇所一緒に見廻りしよっか」

「えっ、ボクもですか？」

終わった一緒に白露の部屋に直行出来るから、という理由もあるが、一応消灯時間過ぎに食堂に居た幸子への細やかな罰、でもある。幸子は感傷に浸る事もそこそこに食堂から強制退室となった。



「はいっ、どうぞ」

椅子代わりベッドに腰掛けた幸子は白露からカップを渡される。見廻りも終わって、今居るのは白露の部屋。渡されたカップの中味は透き通った濃いオレンジ色の液体。ダージリンのセカンドフラッシュ。茶葉はオレンジ・ペコー。

「ダージリンだよ。これも熊野さんに貰ったやつ。気持ちが落ち着くから飲んでみて」

「ありがとうございます」

爽やかな甘い、独特の香りが広がる。何時も幸子が飲んでいたようなその辺のものとは明らかに違う紅茶。食堂で飲んだ時も思ったが、熊野なる人物は紅茶にこだわりがあるのだろう。

「まー、不安だよねえ。私達も着いてくつて言っても、実際戦うのは幸子ちゃんと電ちゃんだけだもんね。でも大丈夫。明日行く所はレ級みたいなのは出ないから」

アイドルの時とは勝手がまるで違う。

どこぞの異世界転生の話のようなチート能力でもあれば別だが、幸子は駆逐艦、それも睦月型という艦娘としては決して能力の高くない部類。しかも練度も低い。電と協力してもどこまで出来るか分からない。初戦となったレ級戦で手も足も出ない経験をしてしまったのが余計に不安を掻き立てる原因ともなっている。昨日まで訓練はしてきたが、いざ本番で同じように出来るかは未知数。風雲や清霜と同等……とまではいかなくともその半分も力が有れば、と思う。

「……ボクでもやれるんでしょうか」

他人に弱音など滅多に吐かない幸子だが、今回ばかりは違う。アイドルの時とは違って、一歩間違えば死ぬ。……いやアイドルの時でも刺されて当に死にかけたのだが。

「平気平気。みんな一度は通る道だから。私や卯月ちゃんもやったから」

「例の化け物駆逐艦も、ですか？」

確か風雲も最初の頃はダメダメだった、と言っていた。卯月や白露も最初は強いわけではなかったらしいし、これで例の化け物駆逐艦夕立もそうだった、というのなら自信とまではいかなくとも何となく頑張れる気がする。

「あー……夕立ね……うーん……」

白露は夕立の話になった途端に歯切れが悪くなった。「夕立はね……まあいいじゃない」と誤魔化した所をみると、やはりアイドル同様に才能がある者は最初から違うという事か。

「まあまあ。幸子ちゃんの実力は初心者としては平均値だよ？」

16話 激闘

「二人ともエエか？目標はポイント11C。軽巡1、駆逐2を確認しとる。今のところコッチの彩雲には気付いとらんぞ」

龍驤の言葉を聞いて、艦装を背負う幸子の背中に冷や汗が流れる。

シヨートランド泊地近海の穏やかな海上。連装砲を握る両掌は緊張で汗ばみ、両足も小刻みに震える。アイドルの仕事なら緊張はしてもプレッシャーに負けるような事はなく、寧ろその程よい緊張を力に変える事ができる。だから幸子は芸能界という世界を渡ってこれたし、自分ならできるといふ自信もあった。

しかしながら、今のコレは違う。命のやり取りであり殺し合いであり、異形との戦争である。それも幸子にとつての真の意味でのデビュー戦。幾ら先のレ級よりも遥かに劣る深海棲艦が相手といつても恐怖は拭えない。

「幸子ちゃん緊張してる？大丈夫だよ。駆逐と軽巡くらいなら撃沈できるし、いざとなつたらみんなも居るから」

すぐ右隣を走る衣笠の励ましの言葉は、半分も耳に入らない。やれるだけの事はしてきたが、本番で化け物相手に通じるかは未知数。幾ら衣笠達が居ても、一歩間違えれば助けが間に合わず水底へ沈んでしまふかも知れない。今度こそ死に飲み込まれるかも知れないのだ。

「フ……フフーン、ボクなら大丈夫ですよ」

口だけ強がってはみるものの、幸子の声は誰が聞いても分かるほど震えていた。余裕など無いのは明らかだ。

「深呼吸しよう？ね？ほら、電ちゃんも緊張してるみたいだし、幸子ちゃんも先に落ち着いて電ちゃんの緊張ほぐしてあげよ？」

そう衣笠に言われて、ふと左に顔を向ける。並走している電もプレッシャーでガチガチと震えていて、彼女の表情は今にも泣きそうに見える。

そんな幸子達の様子を見てこれは駄目だと思ったのか、衣笠は大きく溜め息をついているようだ。「緊張ほぐれるような事……イ級一匹くらいで出て来てくれないかなあ」と衣笠が呟いているのが聞こえ

る。

できるなら電に活躍してもらって自分は安全な遠距離から砲撃するだけ、とかで終わって欲しい。そうできるならどんなに楽な事か。だが実際は逆。幸子が深海棲艦に積極的に接近し、電が援護。危険性で言えば幸子が上。そういう訓練をしてきたのだから当たり前なのだが、頭で納得しようとしても身体と心が付いていかない。「はあ……」と憂鬱と逃げたい気持ちの入り交じった溜め息をついた幸子に、卯月からの通信が聞こえてくる。

『敵艦発見だつぴよん。01215、駆逐イ級が1。輿水、電、その腑抜けた表情を叩き直してくるつぴよん』

口は災いのもととはよく言ったものだ。衣笠の言う通りの事態になった。まだ震える両手で連装砲を握り直した幸子は、一層高まる鼓動を感じながら恐怖を必死に抑え電に声をかけ、また電も震える声でそれに応える。

「行きますよ、電さん」

「……はい、なのです」

今にも死にそうな表情の幸子と電に不安を感じながらも衣笠が「二人とも頑張つて！」と送り出してくれる。深海棲艦最弱とも言えるイ級一匹程度にすら勝てなくてはこれから先やっていけない。自分の力が通じる保障など何処にも無いが、もはや逃げられない所まで来てしまっている。どうしてあの時『内勤にしてくれ』と頼まなかったのだろうと後悔しながら、幸子は電と共に船速を上げてイ級の居るであろう方角へと走る。

「電さん、訓練通りにいきましよう」

「はい、なのです。訓練通りに」

お互い相手にはなく自分に言い聞かせるように言葉を交わす。大丈夫だ、一隻程度なら何とか勝てる、大丈夫だ、と心の中で唱えながら。

幸子の水上電探が、ようやく敵を感知。数は1。海上に他の敵影は見えない。

幸子達を警戒しているのだろうか、向こうにはまだ砲撃の様子は見

えない。今がチャンスと言えるだろう。

幸子は真つ黒な小型の鯨の化け物のようなイ級に連装砲を向ける。当たるかどうかはともかく有効射程内には入っている。初弾は当たらずも問題は無い。幸子に注意を向けさせる事が大切なのだ。隣を並走していた電は既に幸子から大きく離れ、イ級を狙える射程ギリギリの位置につけている。

「お願いしますよ、妖精さん……」

当たればラッキーだと思いつつ、祈るような思いで砲を放つ。爆音と共に飛んでいく砲弾は、イ級の右前方の海面に大きな水柱と共に着水。イ級が幸子の方に視線を向けた。

ここからだ。幸子は意を決してイ級の方へと水面を走る。勿論真つ直ぐにはなく左右に不規則にジグザグと動きながら。少しでも的を絞らせないよう近付きつつ、更に砲を放とうと連装砲をイ級に向ける。

幸子の連装砲の2発目の準備が整うよりも早く、イ級の口から伸びる砲塔が幸子に向けられた。何の訓練もしていなければ、成す術無くアツサリ被弾していたであろう。だがこれ迄散々卯月の叱責に耐えてきた訓練のお陰で、幸子はまだ遠方に見えるそれに反応できた。卯月の砲撃動作に比べたら、イ級のそれはひどくゆっくりとした動きに感じられる。幸子にも『これはもしかしたら何とかかなるかも知れない』と思える。

イ級の砲塔の先端が光り、ほんの少し遅れて轟音が響く。それと同時に砲弾は幸子の右側の後方の水面に水柱と共に着水。勿論幸子が左に急ぎ大きく旋回した結果だ。イ級の2発目が準備されるより早く、幸子は2発目を砲撃。幸子の後方に居る電もチャンスと思つて同時に砲撃。二人の砲撃は見事にイ級に着弾、爆発音と共に炎上したイ級が深海へと沈んでいく。

「や……やりました……やりましたよ！フーン！どうですかボクの実力は！」

声はまだ震えている。だが、確かに勝った。それも自分と電だけの力で。まだ戸惑いはあるものの、幸子は確かな手応えを感じていた。

レ級レベルはまだ無理でも、チート能力は無くとも自分の力は深海棲艦に通じる。それが実感出来たのは非常に大きい。いけるかも知れないという思いが幸子の中に生まれる。

『よし、良くやったつぴよん。次も油断無くやるつぴよん』

珍しく卯月が肯定の言葉をくれた。卯月だつてここで無闇に下手に叱って初戦の幸子と電の士気を態々下げような事はしない。そこまで失敗もしていないし、ここで下手に幸子達の士気を下げて以降の戦闘に影響を与える訳にもいかない。

叱るなら全て終わった後、反省会でだ。

「フフーン、どうですか卯月さん！」

ここで調子に乗るのが幸子の欠点。これには卯月も『コオラ興水、調子に乗るのは任務を完全勝利で終えてからにしろつぴよん！』と注意せざるを得ない。幾ら卯月達がフォローできると言っても、新米の幸子達にとって軽巡を旗艦とした深海棲艦の艦隊が非常に手強い相手である事を忘れてもらっては困るのだ。

「褒めてくれてもいいじゃないですか……まあ卯月さんらしいですけど」

プレッシャーも緊張もまだある。だがやつと少しばかり光明が見えた幸子の身体に力といつもの自信が戻ってくる気がした。

「二人とも良かったよ！この調子で次も頑張っちゃおつか」とポンポンと頭を撫でてくれる衣笠の好意も満更でもない。これが衣笠ではなくプロデューサーならいうことはなかったのだが。

後はこの調子でポイント1ーCの深海棲艦の艦隊を撃沈できればいうことはない。

漸く何かを掴みかけた幸子と電を連れて、一行は南東へと向かう。今日の本来の目的地へ。

数刻後。龍驤の彩雲が此方に向かってくるのが見えた。その遙か向こうに、点と言える程度に見える影が3つ。駆逐イ級が2、そのイ級が3隻繋がったような見た目の軽巡ト級が1隻。今の幸子と電にとっての難敵だ。

『エエか二人とも、無理せず一隻ずつ片付けていくんやで』

龍驤から通信が飛んで来て、幸子は事前のミーティングを思い出す。軽巡を落とすのは今の幸子達には難しい。確実に駆逐艦を一隻ずつ片付けて、軽巡に集中する。さっきのようにやれば大丈夫だと不安を吹き飛ばすように心の中で何度も何度も繰り返し、幸子は大きく息を吸い込んだ。

「幸子ちゃん、行きましょう」

「勿論ですよ電さん」

二人は勇気を振り絞り足を踏み出した。最も近い位置にいる駆逐イ級を睨みつつ走る。先にそれ以外の二隻への牽制からだ。幸子はもう一隻のイ級へ、電は軽巡ト級へと砲を向ける。

幸子の砲撃はイ級の前方海面に落ち、当たらず。一方の電の砲撃は命中し爆音上がるも、ト級は健在。良くて小破という所か。電も幸子も狼狽するが、これは作戦の想定内。軽巡は最初から雷撃で仕留める手筈になっていたからだ。

気を取り直し、幸子は一番近いイ級へ砲撃。イ級の方も幸子へ砲撃。距離も離れていて幸子のはまたしても当たらず。一方のイ級の砲撃は、幸子の左足付近に着水。直撃ではなかったものの、吹き上げた水に幸子は大きく右後方へと吹き飛ばされた。

「幸子ちゃん！大丈夫なのです!？」

「なんとか……」

まだ幸子は立ち上がれていない。イ級はそんな隙だらけの幸子へと砲を向けている。これは避けられない、と思った瞬間、イ級の足元が水飛沫と共に爆発、轟音をあげた。電が放った魚雷が命中したようだ。正直助かった。

「あと二隻、なのです」

電の差し伸べた手を掴み、幸子はどうにか立ち上がった。状態は小破といった所、一方の電は無傷。まだ戦える。

今度こそ。同じ新米の電にばかり良いところを持っていかれる訳にはいかない。何とか自分も良いところを見せないと卯月に何を言われるか分からない。

「今度はボクの番ですよ」

幸子は卜級へと砲撃。またしても当たらないが、これは牽制だ。もう一隻イ級を片付けて二人がかりで挑める状態にするまで、卜級に近付かれては困る。

電の放った砲を避け、イ級は真つ直ぐ幸子へと向かってくる。電よりも幸子の方が落としやすいと判断したのだろう。その口に備えられた砲塔が幸子に向けられる。だがこのタイミングならまだ間に合う。イ級の砲撃より早く反撃に移ろうと連装砲を握り直した幸子の耳に、電の叫び声が響く。

「幸子ちゃん、危ないのです!」

声の後に、風を切り裂く音。それに轟音、続いて幸子の身体は大きく後方へと吹き飛ばされる。続いて左手に激痛が込み上げる。何が起こったのか理解出来ない幸子の瞳に、煙のあがっている卜級の砲塔の先端が見えた。イ級に集中し過ぎたせいで卜級の砲撃に気が付く事が出来なかったのだ。

イ級はといえば、幸子の左脚のホルスターから外れ海面に放たれた魚雷が暴発し直撃、それに巻き込まれ沈んでいつている。不幸中の幸いだ。

痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い。

左手が動かない。視界に入る左手は血まみれ。激痛と恐怖で涙が止まらない。

泣いて立ち止まっている暇が無いのは理解している。ここに留まれば卜級の良い的だ。だが今の幸子は痛みでそれどころではない。海面上にへたり込み、立ち上がれない。

「助けてください電さん、助けてください、妖精さん!」

必死の叫びに応じたというわけでは無いが、幸子の左手の方へと妖精が何人かまとわりつく。勿論遊んでいるわけでも何でもなく、レ級戦の時には乗っていないなかったダメージコントロール担当の妖精達だ。消えるわけでは無いが、徐々に痛みは収まっていく。そうして幾ばく

もしないうちに幸子の左手は辛い鈍痛が響くが動けない程では無い程度に落ち着く。これならどうにかなる。

それでも今のト級との距離の近さは不味い。幸子の状態も大破に近い中破。何か手を打たなくては下手をしたら轟沈の可能もある。

魚雷は無い。幸子の連装砲は砲塔がひしゃげてしまつて砲撃は無理。

苦し紛れに、幸子は連装砲をト級に投げ付けた。それで勝てるとは思っていない。少しでも隙を作ればと思つての行動。

ト級の異形の3つの口がニヤリと恐ろしい笑みを見せた。幸子の撃沈を確信したのだろう。ト級の砲が幸子にゆっくりと向けられた。

瞬間、ト級の真下で爆発が起こる。意識外に居た電の雷撃。そのままト級は轟沈し、幸子は爆風で後方へと押し流される。

『助けてください電さん』。これが二人の奥の手の合図。素人同然の幸子がト級に勝つのは無理だ。同じ理由で電にも無理。二人がかりでも勝てるかは分からない。最悪の場合幸子が無様に立ち回つて困になり注意を引き付け、その隙に電が慎重に狙いを定め仕留める作戦だった。

イ級が運良く片付けられたのもあつたが、結果的に何とか勝てた。非常に危険な賭けではあつたが幸子と電の力だけで。

電は緊張が途切れたのと安堵からか、その場に力無くへたり込んだ。幸子も怪我をした左手を押さえながらヨロヨロと立ち上がつて電の方へとノロノロと走る。どうやら速度も上がらないくらいにやられていたらしい。もしも電が魚雷を外していたら………と思うとゾツとする。

『この馬鹿共！なんてザマだっぴょん!!』

卯月の激怒も当然だろう。見るからに無様。とてもでは無いが上手く戦えたとは言えない。だが、勝った。内容は兎も角結果は合格の筈だ。幸子がここまでやられなければ言う事は無かつたが、なつてしまったものは仕方ない。寧ろ素人がよく中破で留まつたと褒めて欲しいくらいだ。

「痛い……凄く痛いですけど……これで任務達成ですよ、やりましたね電さん」

痛みを堪え、恐怖を乗り切り。幸子は電に笑顔を向ける。「はい！」と笑顔を返した電もこれで少しは自信を付けた事だろう。

……が。幸子の全身から急に力が抜け、電の目の前で膝から崩れ落ちる。「幸子ちゃん、大丈夫なのです!？」という電の声が遠くなり、幸子の視界がゆっくりと白くなっていく。「あれ……?」という間抜けな声を残し、幸子の意識は暗くなっていき……。

ピロリン、というゲームの電子音のようなものが頭の奥底で響き、それと同時に幸子は完全に意識を手放した。

17話 エピローグ、そして

「……………ふああ」

重い瞼を開いて小さく欠伸。右手で目を擦り再び欠伸。
幸子は違和感を感じて辺りを見渡す。自分が横になっているのは
オフホワイト色のベッドの上。

然程大きくない個室のこの部屋も同様オフホワイト一色。ベッド
の脇には小さな収納棚が備え付けられていた。どうやら病院……
いや、泊地内ならば医務室か。しかし幸子が知るショートランドの医
務室とは内装が随分と違う。まだ知らない場所もあったのかと思っ
つつ、喉も渴いたしベッドから降りようと上半身を起こして……更
なる違和感に気付いた。

「痛っ……痛たたたた……」

急に身体を動かしたせいなのか、左の脇腹にジンジンと鈍い痛みが
響く。痛む箇所思わず左手を伸ばし押さえる。

自分に掛かっていた毛布を捲る。幸子が着ていたのは無地のピン
ク色の患者衣。確かに卜級戦で重傷を受けたのは覚えているが、あれ
は確か左腕だった筈。今痛むのは左脇腹だ。そういえば左腕には怪
我の影も形も無い。左腕は入渠して治ったと考えられるが、それなら
今の左脇腹の鈍痛は何なのだろう。

患者衣を捲つてみると、身体には包帯が巻かれていた。患部とみら
れる左脇腹は嚴重に固定されている。何が起こっているのか理解が
出来ない。こんな傷程度、再度入渠すればすぐに治る筈なのに。取り
敢えず入渠しに行こうと考え、ベッドから降りようとゆっくり足を伸
ばす。

立つてみると、何だか身体がフワフワする感じがある。何とい
うか、ずっと横になって久し振りに立ったような感じ。

フラフラと不安定に揺れながらドアの方へと歩く。途中で棚に
飾ってある鏡が目に入り、無意識に視線を向けてみて驚いた。

「……………へっ!？」

思わず左手を伸ばして鏡を掴み、そこに映った自分の顔を見つめ

る。どこをどう見ても輿水幸子、自分自身の顔だったのだ。

「……流石はボクの顔、今日もカワイイですね！」

……違う、今はそうじゃない。いや、元の輿水幸子に戻れたというのなら嬉しい事には違いないのだが、そうじゃない。寝惚けていた頭を無理矢理起こし、幸子は思考をフル回転させる。これはつまり身体が人間に戻ったから艦娘ではなくなった、だから傷は入渠では治せなくなったという事ではないか？そして艦娘ではなくなったという事は、幸子はこの泊地では不要な存在になったという事ではないのか？もしや弥生ではなくなったから卯月に刺されたという事ではないのか？

サーッと血の気が引いていく。ならば今この部屋から出るのは悪手なのではないだろうか。幸子を卯月から遠ざける為にこの部屋に隔離されている可能性が高いという事では？

怖くなってベッドの方へとヨロヨロと戻る。脇腹を押さえ静かに毛布の上に腰掛け、幸子は再び周りをキョロキョロと見回した。

ふと窓の方が気になって腰をあげた。カーテンをゆつくり開けてみると……見覚えのある街並み。日本語で書かれた看板も幾つも見える。どう見ても日本の風景だ。東京●●区の病院から見える風景。

ますます混乱する。艦娘ではなくなったから日本に連れていかれたのか？そんなに長く眠っていたという事は重体だったという事なのか？

コンコン、と扉をノックする音が聞こえ、それに「はい」と思わず応える。扉の向こうから「おや、起きたのですか」という聞いた事のある声が聞こえ、幸子の身体が驚愕でブルツと震えた。

扉が静かに開かれ、声の主が姿を現す。銀色に輝くウェービーロングヘアを靡かせ優雅に歩いてくる抜群のスタイルの彼女こそ、『銀色の王女』と称えられるトップアイドルの一人、四条貴音その人だった。

幸子を見るなり「……面妖な」と呟いた貴音の事を暫く呆然と見つめていた幸子は、ある一つの結論に行き着く。

……全て『夢』だった？

少しずつ思い出してきた。そうだ、ストーカーに脇腹を刺されてその場に倒れて。今まで眠っていたという事か。ならば貴音は忙しいのにスケジュールの合間を縫って態々幸子のお見舞いに来てくれたという事だろう。

「ボクの為に……ありがとうございます。ですけどボクならこの通りもう大丈夫ですよ。カワイイボクは何時も幸運に守られてますからね」

お礼の言葉を述べる気持ちとは違い、表面だけは軽いように取り繕う。何せとんでもない夢だったのだ。夢とはいえ死に掛け、身体を食い千切られ、砲撃を受け。きつと刺された事から来る恐怖があんな夢を見させたに違いない。あんなリアルな夢を。なにせ、普通なら夢というモノは見ても覚えていないか内容をボンヤリとしか記憶してないかなのに今回のモノは全てハッキリと覚えている。殺されかけたレ級や苦戦の末に倒した卜級、電や衣笠、ショートランド泊地の面々、明石や卯月、白露達。そう、夢とは思えない程にハッキリと。

だが。貴音の「そうですか。弥生もどうやら無事戻れたようですね」という一言が、幸子が脳内で下した結論を全て砕いた。空耳……では無い。貴音は今確かに『弥生』という名を口にしたのだ。

「貴音さん、あの……弥生って」

「駆逐艦弥生。弥生は『かんむす』と言っていましたね。輿水幸子、貴女の代わりにその身体に宿っていた少女です」

違っていた。全て夢ではなかったのだ。幸子は本当に弥生と入れ替わっていて、艦娘として向こうの世界で生活していたのだ。

本来なら、無事自身の身体に戻れた事を喜ぶべきなのだろう。しかしながら幸子の両方の瞳から、ポロポロと大粒の涙が流れ始めた。

あんなにお世話になっておいて、お礼の言葉すら伝えていない。一緒に苦労を共にし最後は笑いあえた電にも、ずっと優しく面倒を見てくれた白露にもお礼も別れの挨拶も出来ていない。どうせ戻れるのなら、向こうの世界の面々にもっとちゃんと言葉を伝えてから、自分の気持ちを整理してから戻りたかった。

「おや……輿水幸子、どうしました？」

「何でも……何でもありませんよ……グズッ、エグツ……」

その場にへたり込み、幸子は嗚咽を洩らし泣き続ける。プロデューサーが事態に気付いて部屋へと駆け込んで来たのはその10分後の事。



それから数カ月。幸子も無事退院し、今は事務所に向かうプロデューサーの車の後部座席左側に座って紅茶のペットボトルを飲んでいた。

あの夜に白露が飲ませてくれたダージリンのセカンドフラツシユには遠く及ばないが、紅茶を飲むと何だか頑張れる気がするのだ。

これから幸子の復帰記念ライブの打ち合わせ。武道館をpushさせたというのだから頑張るしかないのだ。このライブを絶対に成功させて、あれからすつかり仲良くなった貴音に必ず追い付いてやるという気持ちで。

「プロデューサーさん、ちょっとコンビニに寄ってください」

紅茶に合うお菓子が欲しい、それとその紅茶のお代わりも。そう思って何気無く頼んだ幸子にプロデューサーは聞こえないようにと「幸子は相変わらずブレないな」と一人ごちる。

「聞こえてますよプロデューサーさん。全く、プロデューサーさんはボクの言う事を聞いてくれればいいんですよ」

「お前なあ……わかったわかった、次コンビニがあったら止まってるよ」

そう小言は言っているものの、幸子の顔には笑みが浮かんでいる。幸子の首にはネックレスが揺れている。ボールチェーンの先に揺れているのは指輪だ。シルバーで出来た、飾りの無い細い指輪。丁度幸子の薬指に填まるサイズ。別にプロデューサーが幸子の事が好きで送ったとかでは無い。退院祝に何か欲しい物はあるか、何でも（できる範囲なら）買ってやるとプロデューサーに言われて幸子を選んだものだ。指に填めると色々勘繰られるので填めるな、とプロデューサーに釘を打たれた結果ネックレスにして忍ばせている代物だ。幸子としてはプラチナ辺りが欲しかったのだがシルバーで妥協した。勿論、

艦娘のケツコンカツコカリの指輪を意識したものだ。

数分もしないうちに、車は近くにあったコンビニの駐車場へ。「幸子は車内で待つてろ」とプロデューサーが一人で適当に買いに行つて来ようと車の扉を開ける。幸子は「お願いします、プロデューサーさん」と何気無く返事をして、何気無くふとコンビニの方へと視線を向ける。

「……………ぶふおっ!」

視界に入ってきた光景に、幸子は口に入っていた紅茶を盛大に吹き出した。プロデューサーの車は大損害を被っているが自分の服に被害は無い辺りは流石は幸子だ。

そんな事は置いておいて。問題はそのコンビニとコラボしているであろうゲームだかアニメだかのイラストである。コンビニに立てられていたのぼり旗に描かれていたのは、多少アニメチックになつてはいるものかどう見ても白露その人だ。制服も白露型改二の、白露が着ていた制服そのもの。

「プツ、プロデューサーさん!何ですかあれは!」

「何って何だよ?」

「アレですよアレ!コンビニとコラボしてるアレですよ!」

まさかこんな所で白露のイラストを見るとは夢にも思っていなかった。それ以前に異世界の、この世界とは無縁のものと思つていたものを目にした衝撃は計り知れない。

「あ、アレか?あれは艦これっていうゲームらしいぞ?あのコンビニと頻繁にコラボしてるらしくてな。その他にもリアルイベントにもかなり力を入れてるみたいだ」

幸子はプロデューサーを無視して、車から飛び降りた。走ってコンビニに入店。

菓子の並んだ棚の上には、ファイルが3種類。どう見ても白露……………というか『SHIRATSUYU』と書かれているので間違いないが……………が浴衣を着ているイラストが描かれたファイル、他には時雨、それと村雨が浴衣を着ているファイル(幸子は時雨と村雨の事は知らないが)。

他にもカツプ麺の棚の上には艦これにちなんだピンバッジが置かれ、パンのコーナーには艦これのイラストが入ったパンが並んでいる。

チョコレートを買おうとファイルが1つ貰えるらしい事を突き止めた幸子は適当なチョコレートを3つ掴むと、迷う事無く白露のファイルを手取る。何の抵抗も無くそれをレジへと持って行き購入。幸子本人は必死に隠しているつもりだが、嬉しそうな表情をしていた。

(せめて大切にしますよ、白露さん)

満足気に車に戻って来た幸子を、プロデューサーは呆れたような表情で見ている。

「……何ですかプロデューサーさん」

「いや、幸子がゲームに興味持つとか珍しいなと思ってな。そうだ、何なら艦これのプロデューサーに頼んでやろうか？イベントに呼んで貰えるかも知れないしな」

別にリアルイベントがどう、とかでは無い。白露本人に興味があるだけだ。しかしながらその声優と仲良くなれば白露の声で励ましの言葉等を言ってくれるかも知れない。頼んでもいいかも知れないと思う。

「そうですね、機会があったらお願いしますよ」



更に翌々日。学校から帰って来た幸子は、スマートフォン液晶を見ていた。アプリを起動。立ち上がったゲームは勿論『艦隊これくしょん』だ。

最近登録がR18で無くなったらしいというこのゲームを、プロデューサーに言っただけで幸子が遊べるようにインストールしてもらったのだ。

「フムフム、まずはサーバーを選ぶんですか。これは当然ショートランド泊地サーバーですね」

空いていたサーバーは大湊、桂島、ショートランドの3つ。これは迷わない。嘗て幸子が切磋琢磨したショートランド泊地一択だ。画

面は次へ移動し、初期艦選択画面へ。

「次は……初期艦？を選ぶんですか。電さん以外は知らない艦娘ですわね……これは誰がいいんですかね？」

さて、困った。電以外は知らない艦娘だ。電を選んでもいいのだが、他の艦娘を選ぶ事で大きなメリットを得られる、とかいう仕様だったら困る。

ここはプロデューサーが「困ったら掲示板で聞くと教えてくれるらしいぞ」と言っていたのを思い出し、幸子なりに調べた艦これの最大手と言われる掲示板に匿名で書き込みを試してみた。

――――

777： 名無しの提督さん 20/06/20 (水) 18:40:

30

初めまして始めたばかりの新人なんですけど、初期艦？は誰にした方がいいんですかね？

778： 名無しの提督さん 20/06/20 (水) 18:40:

40

ファツ!?新人さん!?

――――

書き込んで僅か10秒。あつという間に返事が来た事に驚いた。何か書き込もうとした幸子を他所に、どんどんレスが増えていく。

――――

779： 名無しの提督さん 20/06/20 (水) 18:40:

45

>>777

新人だっ、困めっ

780： 名無しの提督さん 20/06/20 (水) 18:40:

46

>>777

新人だっ、お茶をお出ししろっ！

781：名無しの提督さん 20／06／20（水）18：40：

50

>>>777

初期艦なんてゴトランドに決まってるだろ！

782：名無しの提督さん 20／06／20（水）18：40：

55

>>>781

初期艦なら大天使五月雨ちゃん一択なんだよなあ

783：名無しの提督さん 20／06／20（水）18：40：

56

>>>781

ばっかお前初期艦は漣に決まってるだろいい加減にしろ

784：名無しの提督さん 20／06／20（水）18：41：

15

>>>783

叢雲なんだよなあ

785：名無しの提督さん 20／06／20（水）18：41：

25

>>>781

新人にゴトランドネタはやめてさしあげろ

786：名無しの提督さん 20／06／20（水）18：41：

44

>>>777

マジレスすると誰を選んでも大丈夫だぞ

5人とも比較的すぐ手に入るからな

—————

「なるほど、誰でも大丈夫なんですね。それなら電さんでいいですかね」

掲示板に言われるまま、幸子は電を選択。その旨を掲示板に報告し

てみた。

――

787： 名無しの提督さん 20／06／20（水） 18：42：20

777です。皆さんありがとうございます。会った事のある電さんにしました

788： 名無しの提督さん 20／06／20（水） 18：42：25

>>>787

おっ、おう…

789： 名無しの提督さん 20／06／20（水） 18：42：35

>>>787

比叡「うわぁ」

790： 名無しの提督さん 20／06／20（水） 18：42：48

>>>787

：艦娘遊撃隊に電ちゃんっていましたっけ？

791： 名無しの提督さん 20／06／20（水） 18：43：01

皆さん失礼ですね！本当ですよ！

――

本当だと思わず書き込んでしまったが、冷静に考えてみたら信じてもらえる筈がない。（やっちゃった）と思いつつ、幸子は気を取り直しゲームを進める事にする。

「…：初めての建造、ですか。出来れば白露さんが出てくれればいいんですけど。あ、でも狙った方が良い艦娘とかあるんですかね？」

建造画面では燃料、弾薬、鋼材、ボーキの数字がそれぞれ30～99の範囲で変更できる。他のゲームのようにここで手に入れた方

が良い艦娘とかがあるかも知れない。またあの掲示板に書き込むのも気が引けるが、聞いておくだけならと思う。

1 1 1

8 1 1 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 5 :

3 1

7 7 7 で書き込みした者ですが、初めての建造で狙った方が良い艦娘とかあるんですかね？白露さんとかどうやって狙うんですか？

8 1 2 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 5 :

5 1

>> 8 1 1 さっきの新人さんか。最初のうちは最低値のALL3

0 で大丈夫だぞ

8 1 3 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 6 :

0 2

>> 8 1 1

この艦娘が居ないとクリアできない、とかは無いから最初は気軽に建造して大丈夫

8 1 4 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 6 :

3 1

>> 8 1 1

股間に聞け

8 1 5 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 6 :

5 4

>> 8 1 1

白露か。白露は良いぞ。やはりおっ〇いは正義

8 1 6 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 7 :

1 1

>> 8 1 1

タシケントかジャービスかフレッチャーが狙い目だぞ

8 1 7 : 名無しの提督さん 2 0 / 0 6 / 2 0 (水) 1 8 : 5 7 :

2 4

鬼畜ウ!

――

その内容に「はあ……」と溜め息。察するに最初は気にせず最低値で建造して大丈夫らしい事は分かった。燃料30鋼材30弾薬30ボーキサイト30で建造してみる。

「建造時間?何ですかこれ?あ、短縮できるみたいですね」

どうやら10数分の建造時間をスキップできる事に気付いた幸子は、あまりよく理解していないままに建造を終了。出来た艦娘は、弥生だった。

「弥生さん、ですか。向こうの世界でのボクの身体だったわけですし、秘書艦にしておきますか」

幸子は深く考えずに駆逐艦弥生を秘書艦にした。その瞬間、幸子の頭がグラツと大きく揺れた気がした。

「え……あれ……」という言葉を残し、幸子はその場に倒れた。意識が遠退き、視界が真つ暗になっていく。

◆◆◆◆◆

ゴボゴボゴボ……

幸子は気が付くとお湯の中に沈んでいつていた。

お湯が口に入ってくる。非常に苦しい。このまま溺死してなるものかと慌てて水面から顔を出す。

「……ブハッ!?死ぬかと思いましたよ……?……?」

直ぐに気付いた。見たことのある大きな浴槽を持った浴室……：ショートランド泊地の入渠施設そのものだった。

「えっ、嘘ですよね……?」

キョロキョロと視界を動かした幸子の右隣。いつも持ち歩いてきたファイルに描かれたイラストの本物、白露がお湯に浸かりながら心配そうにこちらを見ていた。

「弥生ちゃん、大丈夫?」

久し振りに聞いた白露の声に、幸子は思わず涙ぐむ。「白露さんっ

「白露さんなんですよね!? 会いたかったんですよ!」と大袈裟にダイブし白露に抱き付いた。白露の方も「……………まさか幸子ちゃん? 幸子ちゃんなの!」と気が付いたようだ。

「あたしも会いたかったよ、幸子ちゃん! でもどうしてまた弥生ちゃんと入れ替わったの?」

幸子はハツと我に返った。そうだ、どうしてまた弥生と入れ替わったのか。切欠は恐らくあの『艦これで秘書艦を弥生にした』という行動だと推測は出来るが……………。

「輿水!? お前つ!! 何で弥生と入れ替わってるつぴよん!! 早く元の世界に戻れつぴよん!!」

幸子の左隣から、今度は卯月の声。卯月は飛び付いてきて幸子の両肩を掴みグラグラと身体を揺すってくる。

「出来るならボクだって帰りたいですよ! もうすぐ武道館ライブなんですからね!」

「おーそれならとつとと帰れつぴよん! 早く弥生を返せつぴよん!」

「まあまあ二人とも、少し落ち着いて」という白露を他所に、裸のまま幸子と卯月の罵倒は続く。

「帰れこの馬鹿輿水! うーちゃんはお前を追い出すの諦めないつぴよん!!」

「ええボクだって絶対帰ってやりますからね! ライブまでには帰ってやりますよ!」



倒れていた幸子はムクリ、と上体を起こした。起動したままの艦これのアプリを閉じて、スマートフォンに登録されているアドレスを探し、通話ボタンを触る。

『どうしました、輿水幸子』

電話の相手は貴音だ。幸子……………はフウ、と小さく息をはいて、「駆逐艦弥生、です。今から会えませんか」と一言。

『……………面妖な』



▽ 『『弥生』ほか駆逐艦一隻を含む艦隊で鎮守府正面海域に進出、敵主力を捕捉撃滅せよ 【達成】

▽ 『『作戦ヲ実施シテ下サイ』

▽ 『『弥生』ほか駆逐艦一隻を含む艦隊で南西諸島沖、製油所地帯湾岸に進出、敵主力を捕捉撃滅せよ 【進行中】